月刊 FALCOM MAGAZINE

Vol.59



『イースⅧ』発表記念！

ドラマCD
『イース セルセタの樹海
～the prologue～』
シナリオ再収録!

エステル&ヨシュアの
ファルコム
空の軌跡ラジオ
の舞台裏

『閃の軌跡Ⅲ』や
『暁の軌跡』の情報も到着!
ファルコムニュース

○○先生の女子力アップ大作戦!
みんな集まれ!
ファルコム学園

監視塔襲撃事件発生!
調査に臨むガイウス達だが……
英雄伝説 閃の軌跡

イラストメッセージ
啄木鳥しんき

ついに正式発表! 『イース』シリーズ最新作!

イースⅧ -Lacrimosa of DANA- 特集



FALCOM MAGAZINE

CONTENTS



●製品情報
●タイトル　：イースⅧ –Lacrimosa of DANA
●発売日　：2016年夏予定
●ジャンル　：アクションRPG
●対応機種　：PlayStation®4、PlayStation® Vita
●プレイ人数：1人
●CEROレーティング：審査予定

『イース』シリーズ完全新作の詳細がついに到着！ アドルの新たな冒険が今始まる!!

2014年の東京ゲームショウで制作が発表された『イース』シリーズ最新作。そのタイトルならびに発売日の続報がついに到着！　今回のアドルは21歳ということで、時系列としては、『Ⅴ』と『Ⅵ』の間の冒険が描かれていくようだ。また、今回はジャンプアクションが復活しているほか、アクション要素もかなりの進化を遂げているとのこと。その辺りの開発画面や詳細も到着次第、随時紹介していくので楽しみに待て！

◆ PROLOGUE

君はアドル＝クリスティンを知っているか？

稀代の“冒険家”アドル＝クリスティン
彼は生涯をかけて幾多の冒険に挑み、
百余冊にも及ぶ“冒険日誌”を残した。

この物語はその“冒険日誌”の一冊、
『ゲーテ海案内記』に記されている
アドルの冒険のひとつである――。

《セイレン島》

グリーク南方の多島海
“ゲーテ海”に浮かぶその島の海域では
航行する船が謎の沈没を遂げるという噂があった。

サンドリアからエレシア大陸に向かう旅客船
《ロンバルディア号》に乗り込んだアドルは
突然船を襲った巨大海洋生物によって
乗客たちとともに船の沈没に巻き込まれる。

目を覚ますと
そこは輝くような白い砂浜の広がる海岸。
沖に目をやったアドルは気づく。

その島が“永遠に呪われた島”
《セイレン島》であることに。

人の手の入ったことのない原始の自然。
外界とは異なる進化を遂げた奇妙な生物たち。
そして、点在する謎の古代文明遺跡。

漂着した他の乗客たちを救出し
人間に襲い掛かる《古代種》から身を守るため、
拠点となる”漂流村”を築いていくアドルたち。

やがて、アドルはその地で不思議な“夢”を見る。
蒼い髪色をした神秘的な少女と、
彼女が生きる見知らぬ世界。

何故その島が“永遠に呪われた島”と呼ばれるのか。
その島に秘められた大いなる謎とは。

そして、アドルの夢に現れる
少女とは何者なのか――。

伝説の波間に埋もれた絶海の孤島で

アドルの新たな冒険が始まる！



アドル＝クリスティン

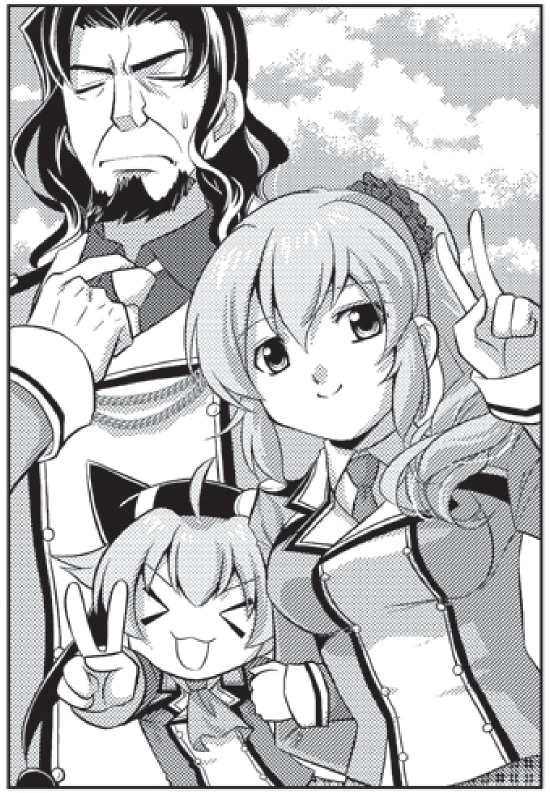
燃えるような赤毛と、少年のように澄んだ黒い瞳をもつ21歳の青年。16歳で故郷エウロペ地方の名も無き山村を飛び出し、古代王国《イース》、秘境《セルセタの樹海》など幾多の冒険に挑み、若いながらも「冒険家」としてその名が知られつつある。
旅客船ロンバルディア号に乗船していたがゲーテ海航行中、謎の巨大海洋生物に襲われ乗船客とともに行方不明となってしまう。






ゲームでは描かれなかった特務支援課の
公式設定をもとに描かれたエピソード集！
英雄伝説
碧の軌跡
ショートストーリーズ
●田沢大典
Illustrator
●がおう（Ga-show）
英雄伝説 碧の軌跡 ショートストーリーズ
『軌跡』シリーズの第2弾『零／碧の軌跡』で主人公を務めたロイド、エリィ、ティオ、ランディら特務支援課メンバーの、ゲーム中では描かれることの無かったエピソードを一冊にまとめた外伝小説。ロイド、エリィの子ども時代の話や、ティオ、ランディがパーティーメンバーが離れていた間の出来事を垣間見ることができる！
好評発売中！
1,200円+税
判型：B6正寸　並製ページ数:208
ISBN：978-4-89610-849-1
発行元:フィールドワイ　発売元:メディアパル
©Nihon Fal
©DAISUKE TAZAWA , GAOU 2015
©2015 FIELD-Y


FB ファルコムBOOKS
これを読むまで
しぬでないぞ!!
『月刊 Falcom magazine』に掲載された読み切りコミック 13 本を完全収録したコミックアンソロジーがついに登場！　新旧ファンも納得のラインナップで贈る、ファルコム愛溢れる1冊を是非ご堪能あれ！
カバーは『英雄伝説空の軌跡』コミカライズを担当した啄木鳥しんき先生の豪華描き下ろし♪
好評発売中!!
収録テーマ作品
『イース』
『ブランディッシュ』
『ヴァンテージマスター』
『ぐるみん』
『ザナドゥネクスト』
『軌跡シリーズ』
ふぁるこむ
コミック
ざんまい
価格：本体920円+税
ISBN 978-4-89610-818-7
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp



みんな集まれ! ファルコム学園

新久保だいすけ

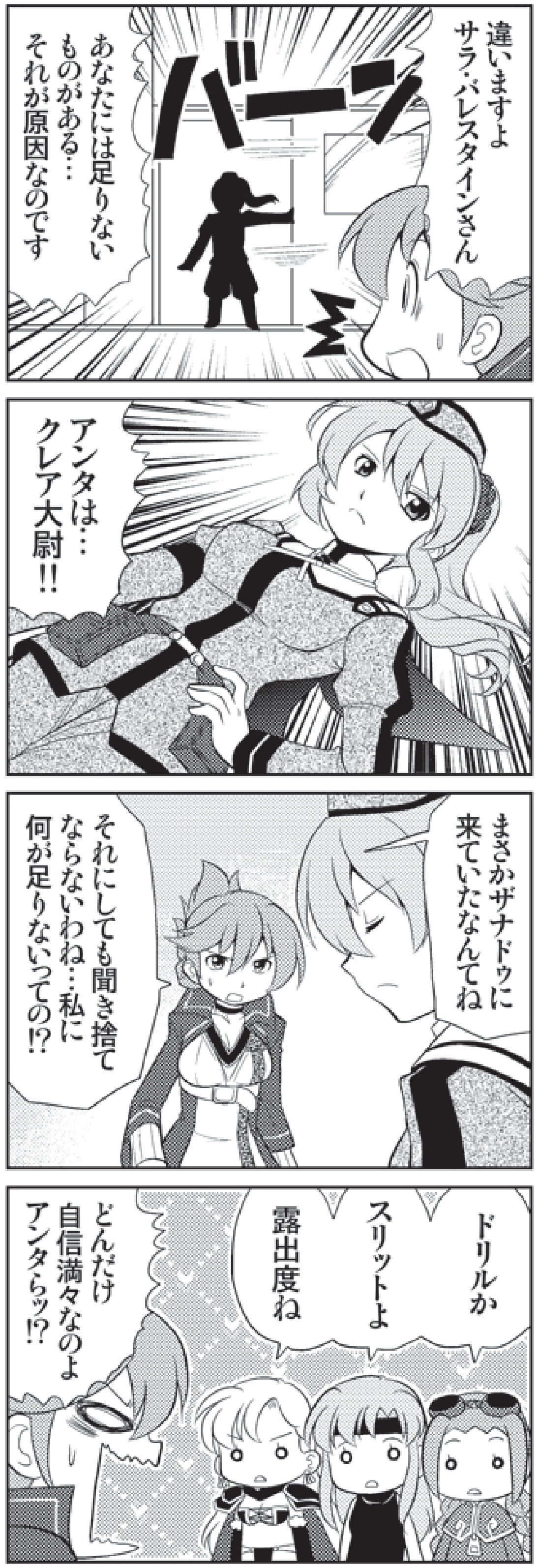
学園の終業式



追い込まれる年末



あなたに足りないもの



アイスメイデン



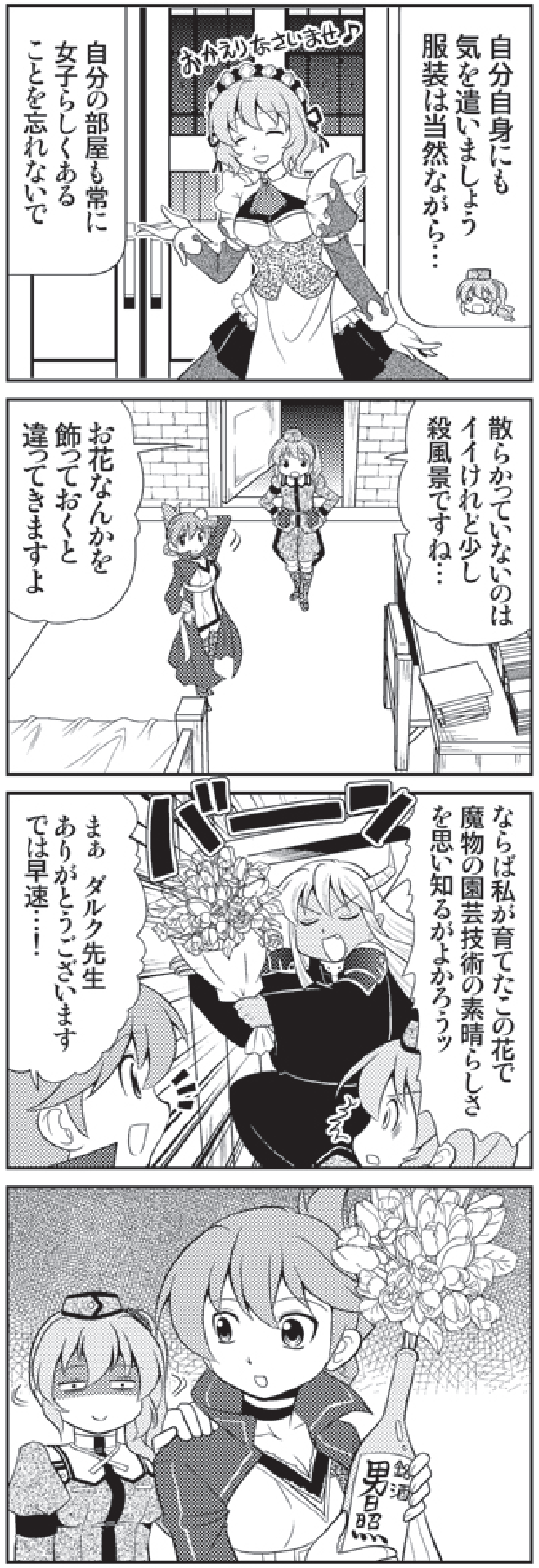
女子力（物理）



気を遣おう



花ある日々を



立派なオトナ



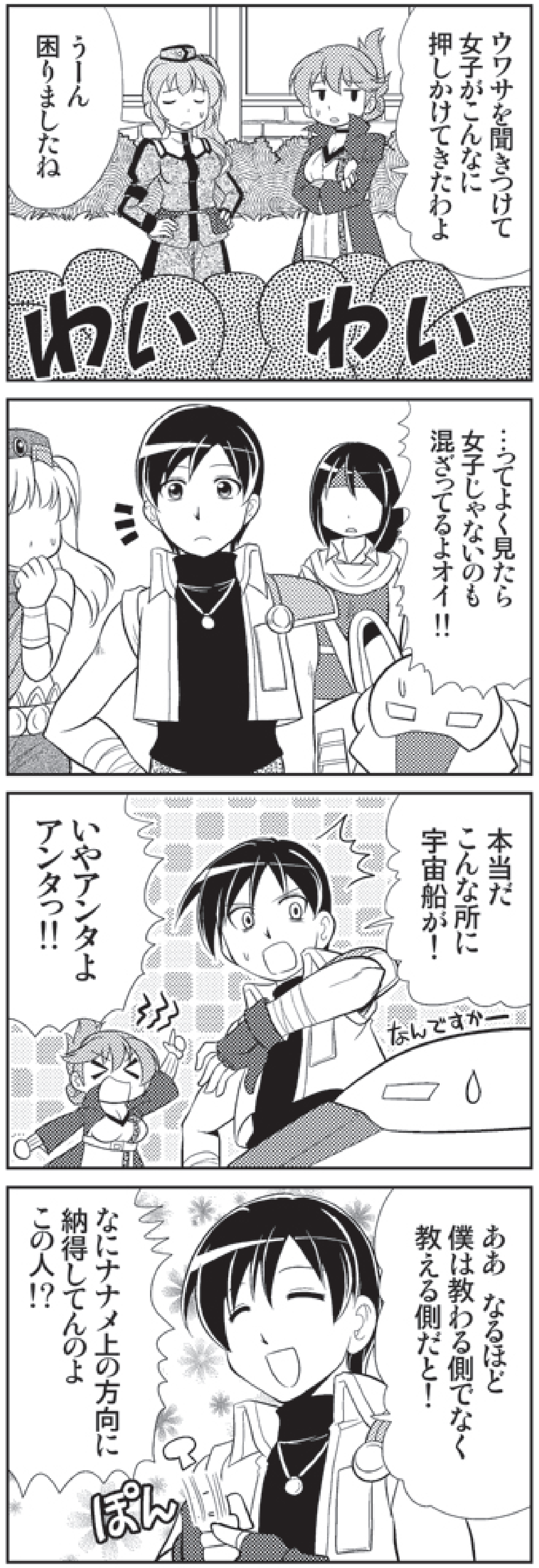
オトナになる方法



アップさせたい人



女子じゃないけど



本来の使用目的



その気持ちの正体



そのドキドキの正体

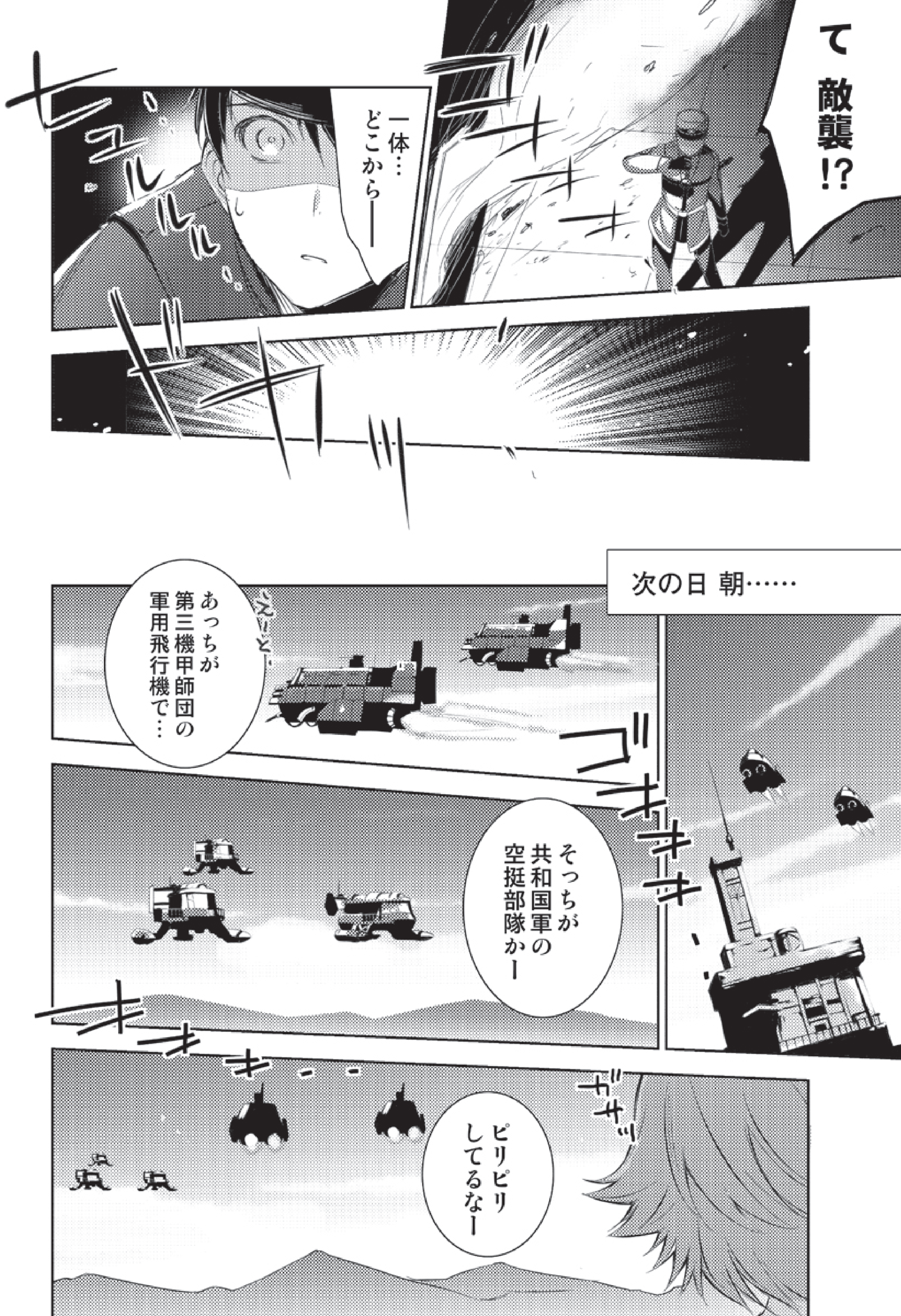


最強の女子力




特別実習２日目 深夜
帝国監視塔
THE LEGEND OF HEROES
閃の軌跡
第15話
原作：日本ファルコム（『英雄伝説 閃の軌跡』）
脚本：恵村まお
漫画：さがら梨々
お おい…！
なんだ…？ あれは…
共和国軍が襲われている…？
どこかの師団が動いてるってことかよ!?
馬鹿な!? そんな話は聞いてない！
くっ…とにかくゼンダー門に連絡を――！
……え
ヒュルルルル
うわぁぁあっ!?


理想の学園生活がここにある!?
まさかのTVアニメ化も二度成し遂げた、日本ファルコムオールスターギャグ四コマ第4巻、好評発売中です！ 新たなキャラクターも続々と登場し、ゴーファイ！の波はまだまだ止まらない!?
FB ファルコムBOOKS
既刊もよろしく!!
ファルコム学園
新久保だいすけ
最新作『東京ザナドゥ』キャラが早くも殴りこみ！
みんな集まれ！
ファルコム学園④
著者：新久保だいすけ
本体：850円＋（税）
ISBN:978-4-8021-3013-4
好評発売中!!
©Nihon Falcom Corp. All right reserved.
発行：フィールドワイ
発売：メディアパル
フィールドワイのHPはこちら
www.field-y.co.jp


て
敵襲!?
一体…どこから――
ヒュルルル…
ゴオオオオ
ズガガガ
次の日 朝……
えーと
あっちが第三機甲師団の軍用飛行機で…
ゴオオオオオ
そっちが共和国軍の空挺部隊かー
オオオ
ガサッ
ピリピリしてるなー

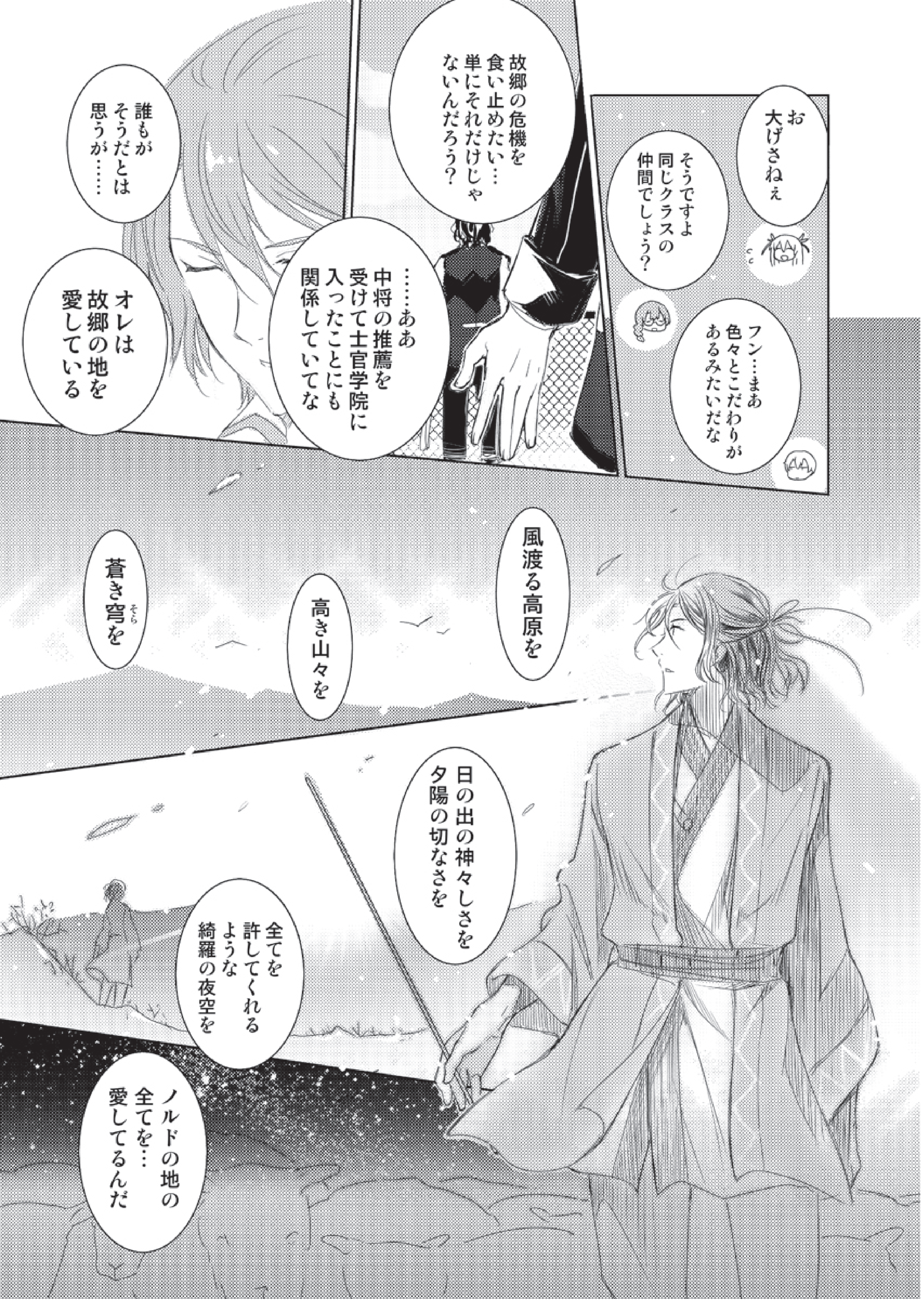

ゼンダー門にも導力装甲車が集まってるみたいだし
それも当然かぁ
帝国と共和国が戦争を始めちゃうかもしれないんだもんね
さてお仕事お仕事


共和国お得意の空挺機甲師団の先駆けか
戦車部隊が到着するのも時間の問題のようだな…
中将…!
おぬしら…!
被害は…
こちらはどのような状況なのですか!?
ー
それよりおぬしら
今すぐゼンダー門に向かえば貨物列車の時間に間に合う
今回の実習は切り上げてそれで早めに帰るがいい
ええっ!?
共和国軍の出方しだいだが……
あと数時間もしないうちに戦端が開かれる可能性は高い
クッだからと言って…
こんな中途半端な形で帰るわけには…!
…中将
今回の一件どちらが先に手を出したのですか?
ガイウス…!
……調査中だ
もちろん先にも後にも帝国軍が動いた事実はない
にも関わらず監視塔は破壊され守備兵からは死傷者も出た
ゼンダー門を任された者としてこのまま見過ごす訳にはいかん



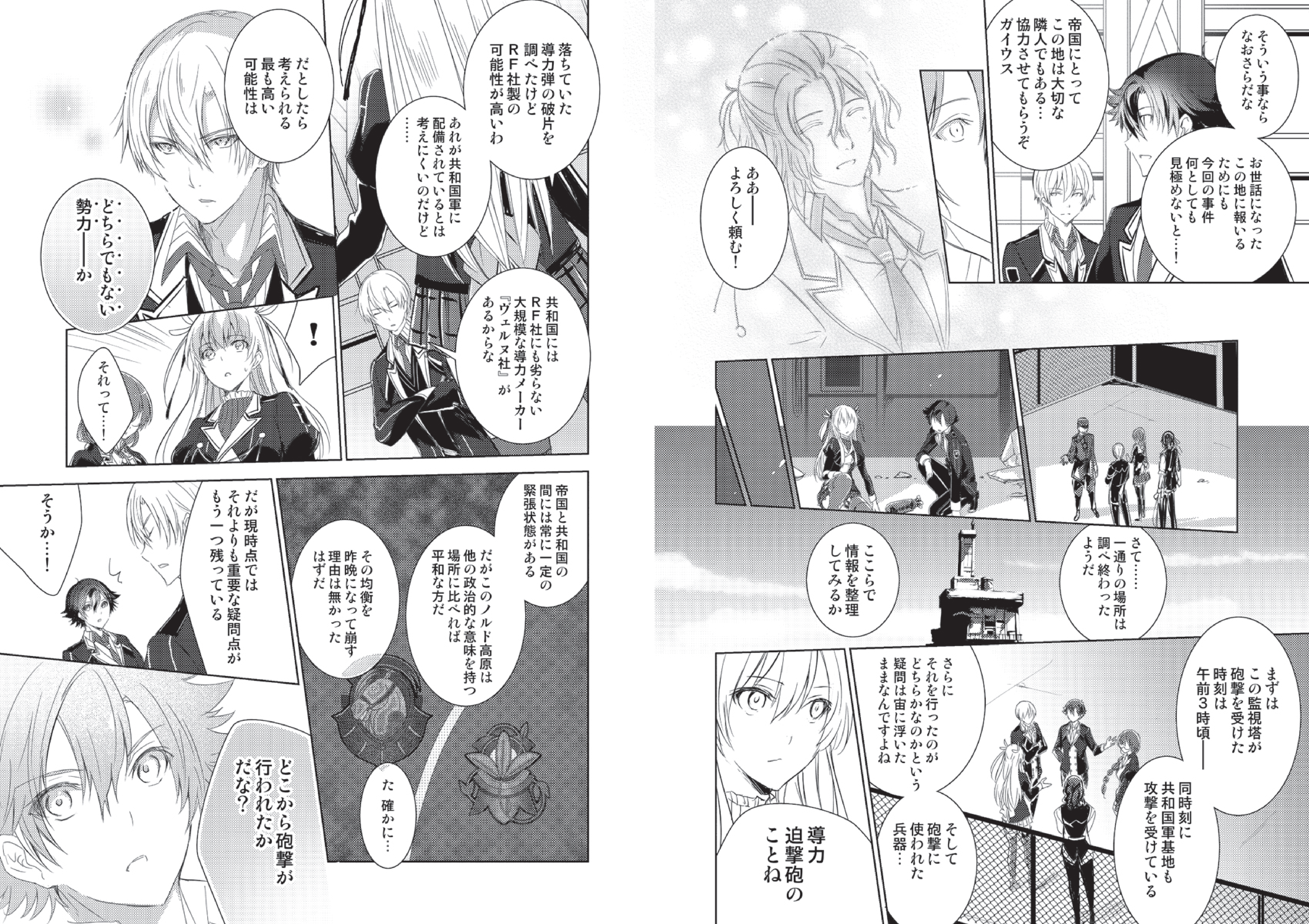
仮に共和国軍の偽装工作だったとしてだが
あちらの基地の被害はどの程度のものだったんだ？
幾つかの施設にダメージを受けたようだ
被害はこちらと同等 …いや
遥かに上には見えた
そ それって…？
どう考えても何かがおかしいということでは!?
だが もはや悠長に様子を伺う時期は過ぎている
全面戦争は避けたい所だがある程度の衝突は覚悟の上だ
我らにしても彼らにしてもな
……
でしたら中将
どうか今回の事件の調査をオレにお任せください
!
ガイウスさん…!?
ちょ 調査って…
ご存知のようにこの一帯ならばオレの知らない所はありません
ノルドの静けさを乱す今回の不可解な事件…
必ずや原因を突き止めてみせます
ゼクス中将
……お前…
……
及ばずながら俺たちも力になります
!
いや 待ってくれ これはノルドの…オレの故郷に関する問題だ
戦が始まる前にせめてお前たちだけでも――
水臭いですよ ガイウスさん


アルバレアの名に懸けて…尻尾を巻いて逃げ出す無様を晒すわけにはいかないからな
私だって身内がこちらにご厄介になってるのもあるし
それにガイウス自身帝都駅で言っていたことだろう？
『全員が無事に戻ってくるのが何よりも重要だ』って
フフ一本取られたなガイウス
……
現在10時5分——12時半までの調査を許可する！
それまでは戦端が開かれぬようこちらも力を尽くしてみよう
はいっ！
皆……ありがとう
本当にいくら感謝してもしきれないくらいだ


お大げさねぇ
そうですよ同じクラスの仲間でしょう？
フン…まあ色々とこだわりがあるみたいだな
故郷の危機を食い止めたい…単にそれだけじゃないんだろう？
……ああ中将の推薦を受けて士官学院に入ったことにも関係していてな
誰もがそうだとは思うが……
オレは故郷の地を愛している
風渡る高原を
高き山々を
蒼き穹を
日の出の神々しさを夕陽の切なさを
全てを許してくれるような綺羅の夜空を
ノルドの地の全てを…愛してるんだ


わ 私も故郷の ルーレには 思い入れが あるけど…
……
愛している とまでは 言えるのは…
っっ
さすが ガイウスさん…
しかし…ならば どうして このノルドの 地を離れたんだ?
正直 お前のような 男が故郷を離れて 入学したのが 不思議なくらいだが
オレ自身―― 明確な答えが 出せているわけ ではないが…
オレの幼い頃 共和国軍の 基地が東に 築かれ
帝国軍が 監視塔を 建ててから ……
それは 少しずつオレを 不安にさせた
教会の 巡回神父からは 大陸の歴史を 色々と教わった
そして 大国同士の 争いで消えた民族が いかに多いかに 驚かされた
そして 《導力革命》――
あらゆる生活と 文化に影響し “時間”と“距離”の 概念を大幅に覆して しまったあの発明…
それを知った時 気付いてしまった


オレが愛している ノルドの地が平穏で あり続ける保障は ない…
!……
驚いたな そこまで考えて いたのか…
いずれ「外」の 大きな流れに 巻き込まれる 可能性が あり得ると
それで ガイウスさんは 大切な故郷を とりまく「外」を 知るために 士官学院に…?
ああ… きっかけは 多分な
あの時のオレは 何か得体の知れない 矛盾に怯え 焦って いたんだと思う
中将と 知り合ったのを きっかけに 《トールズ士官学院》 の事を知って……
そこに推薦して もらえると聞いて 気付いたら申し出に 飛びついていた
…帝国が どういう所なのか ほとんど 知らなかったと いうのにな
どうやら 俺たちの誰よりも 大それた理由で 来たようだな?
確かに 故郷を愛し 守るために いったん外の 世界を知るか…
フン… まったく
正直 帝国人には 出てこない発想 でしょうね
でも そっか… そういう事 だったのね

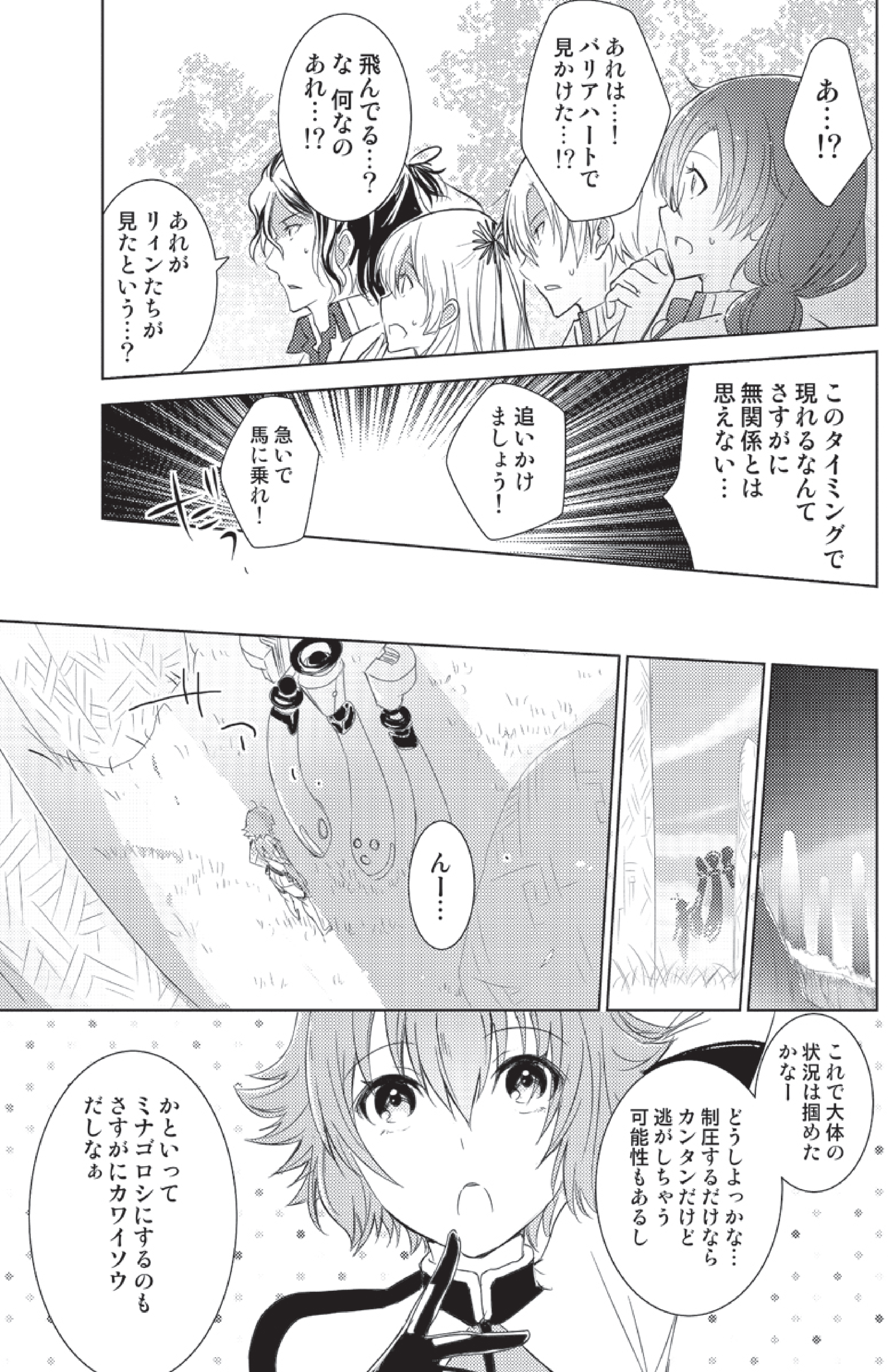

そういう事ならなおさらだな
お世話になったこの地に報いるためにも今回の事件何としても見極めないと…！
帝国にとってこの地は大切な隣人でもある…協力させてもらうぞガイウス
ああ――よろしく頼む！
さて……一通りの場所は調べ終わったようだ
ここらで情報を整理してみるか
まずはこの監視塔が砲撃を受けた時刻は午前3時頃――
同時刻に共和国軍基地も攻撃を受けている
さらにそれを行ったのがどちらかなのかという疑問は宙に浮いたままなんですよね
そして砲撃に使われた兵器…
導力迫撃砲のことね
落ちていた導力弾の破片を調べたけどRF社製の可能性が高いわ
あれが共和国軍に配備されているとは考えにくいのだけど……
だとしたら考えられる最も高い可能性は
共和国にはRF社にも劣らない大規模な導力メーカー『ヴェルヌ社』があるからな
…………どちらでもない勢力――か
！
それって…！
帝国と共和国の間には常に一定の緊張状態がある
だがこのノルド高原は他の政治的な意味を持つ場所に比べれば平和な方だ
その均衡を昨晩になって崩す理由は無かったはずだ
た確かに…
だが現時点ではそれよりも重要な疑問点がもう一つ残っている
そうか…！
どこから砲撃が行われたかだな？


うーん……さすがにそれを割り出すのは難しそうだけど…
だが それを示さない限りは今までの推理は意味をなさない
とても戦争を止める口実にはなり得ないだろう
しかし しらみつぶしに探そうにもノルド高原は広すぎる…
――いえ
もしかしたら何とかなるかもしれません
アリサさんとガイウスさんの力をお借りして計算していけば…
えっ…!?
――うん 解りました
砲弾が発射されたのはここから南の方角みたいですね
地図で言うと…だいたいこの範囲になります
ばさっ
この監視塔がある場所からもそう遠くはないですね


……
ん?
監視塔の被害があった場所と砲弾の速度や描く軌道……
そこにノルドに吹く風がどの程度の影響を与えるのか…
それらをあわせて考えれば大体の位置が割り出せる…か
さ さすが委員長…
フン レーグニッツが躍起になるのが滑稽にすら思えてきたな
あ あはは… そんなことは
…よし すぐにでも向かってみよう
ああ!
エマが示したのはこの辺りかしら…
みんな あれを!


縄梯子…?
あれは…
こんな所に…? ちょっと怪しいわね
しかしさすがにあの高さには届かないな… 掴まれるような場所もないし
ごにょごにょ
えっ 私の弓で!?
あの縄梯子をまとめている紐に上手く当てられたらって…
うーん
——はっ!
さすがに無理がある気がするんだけど
まあ他に手もないことだし
(落ちろ)
……Cadite.
ボッ
ああっ…
あ…!?
できた…?
はずしたと思ったけど…
フフ 見事な腕だな
でもなんだか妙な時間差があったような…
さすがはアリサさんですね!
あっ!
あれは…!


……
導力迫撃砲…思った通りRF（ウチ）の旧式だわ
つい最近使われた形跡もある…
…なるほど周囲からはちょうど死角になっている
闇に紛れて砲弾を発射しそのまま放置して逃げた……そんなところか
だが…戦争を回避するにはこれだけでは不十分だ
そうだな もう少し手がかりが欲しいけど ここは一旦中将に報告に…
ユーシス！委員長！
あ…あれを！
えっ…!?


あ…!?
あれは…！バリアハートで見かけた…!?
飛んでる…？な 何なのあれ…!?
あれがリィンたちが見たという…？
このタイミングで現れるなんてさすがに無関係とは思えない…
追いかけましょう！
急いで馬に乗れ！
んー…
これで大体の状況は掴めたかなー
どうしよっかな…制圧するだけならカンタンだけど逃がしちゃう可能性もあるし
かといってミナゴロシにするのもさすがにカワイソウだしなぁ



――動くな！
あ…シカンガクインの人たち！
!?
俺たちのことを…!?
貴様…一体何者だ!?
そ その大きなものは一体……
えぇっ!? ち 違うよぉ〜！
ばばっ
はっ
君は軍の基地が攻撃されたことに関係しているのか…？
なんかロコツに疑われちゃってる!?
そっかぁ その手があったか！
キミたちが手伝ってくれれば万事解決！オールオッケーだよね？
キミたち結構強いし！
なに…!?
強い…？
貴様…バリアハートで俺たちのことを見ていたな…？
2つの軍事施設への攻撃…貴女の仕業なの!?
だ だから違うってば〜！
ああもう 何て説明すればわかってくれるんだろ……
だったら
話せる範囲までででも構わない
君が知っている情報を教えてくれ
リィン…!?
オレたちの力が必要と言ったな？
この地の平穏を取り戻せるならいくらでも力を貸そう
だから――どうか話してほしい



英雄伝説 閃の軌跡 1

原作：日本ファルコム（『英雄伝説 閃の軌跡』）
脚本：恵村まお　漫画：さがら梨々

日本ファルコムの大人気RPG『軌跡』シリーズ。その最新作『英雄伝説 閃の軌跡』がコミカライズ化! メインストーリーを描きつつも、本編上では描かれなかった展開やキャラクターも多数登場で、人気急上昇となった本作の単行本第1巻がついに発売! 強大な軍事国家・エレボニア帝国」にある名門・トールズ士官学院・に入学した主人公のリィン・シュバルツァー。彼はそこで何を見、何を思うのか……。

好評発売中

926円（税抜）

判型：A5正寸（カバー4C、帯2C、本文1C）
並製ページ数：152ページ
ISBN：978-4-8021-3011-0 C0079



ファルコムニュース

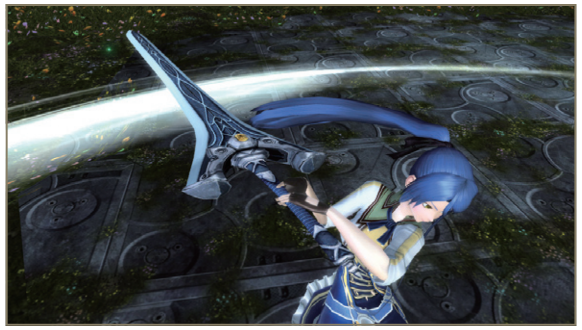
ファルコムファンに贈る最新ニュースをピックアップ！

『ファンタシースターオンライン２』『英雄伝説 閃の軌跡II』コラボイベント

さらなる冒険は未知の惑星で!

セガゲームスの大人気MORPG『ファンタシースターオンライン２』と『英雄伝説 閃の軌跡II』が夢のコラボを実施中！　優良ポイントACで引けるスクラッチ「レジェンドオブヒーローズ」でリィン・アリサ・ラウラ・フィーのコスチュームやヘアスタイルなどが手に入る。他にも武器迷彩として彼らが作中で使用している武器も実装、『PSO2』の世界で士官学院生になりきろう。PC／PS®Vita版のコラボイベント期間は2016年１月13日まで。iOS／Android版の『PSO2es』では12月31日までesスクラッチ「閃の軌跡II・チップコラボ」を配信しているので、こちらも要チェック！







e-onkyo music ハイレゾ音源年末年始セール

ファルコム対象アルバムがプライスオフ!





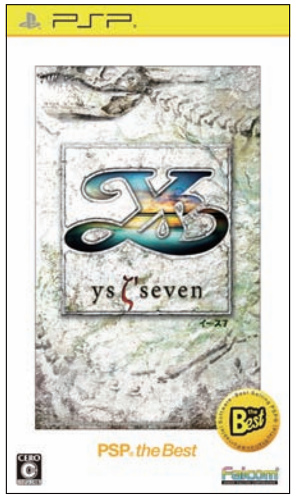


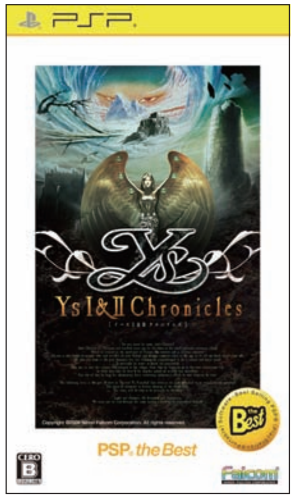
○セール対象作品
『英雄伝説 空の軌跡FC Evolution オリジナルサウンドトラック』
『英雄伝説 閃の軌跡II サウンドトラック・オリジナルマスター』
『軌跡 jdk アクースティックス』
『閃光の行方』（『英雄伝説 閃の軌跡II』オープニングテーマ）
『英雄伝説 閃の軌跡 サウンドトラック・オリジナルマスター』

ハイレゾ音源配信サイト「e-onkyo music」では、ただいま年末年始キャンペーンを実施中！　対象商品は『軌跡 jdk アクースティックス』、『英雄伝説 空の軌跡FC Evolution オリジナルサウンドトラック』などの名盤全５作品。キャンペーン期間は2016年１月15日の正午まで。年末年始のお出かけや家で過ごす時間のお供にファルコムミュージックはいかが？　購入、ダウンロード方法や詳細は公式サイトまで→（http://www.e-onkyo.com/music/）

イースシリーズ年末年始セール

名作シリーズがお求めやすく!







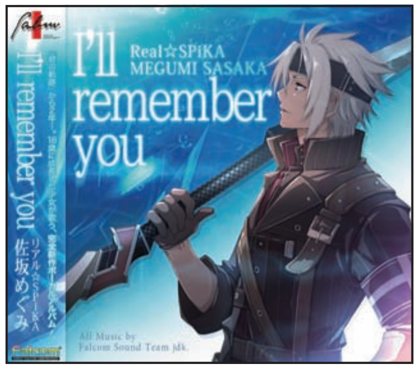
先日発表されたシリーズ最新作『イースVIII -Lacrimosa of DANA-』の2016年夏発売決定を記念して、PSNで配信中のPSP®対応イースシリーズ３作品がお買い得価格になって登場！　通常配信価格の30％オフだけではなく、なんとPS®Plus会員の方は40％オフになるチャンス。期間は2016年１月17日まで。日本ファルコムが贈る大人気シリーズ、今までプレイしたことがなかった皆様はこの機会にたっぷりと楽しんで！

○セール対象作品
『イースＩ＆IIクロニクルズ PSP the Best』『イース フェルガナの誓い スーパープライス』
『イースSEVEN』

○PlayStation(TM)Network公式サイト　▶ http://www.jp.playstation.com/psn/

新作CD２タイトル １月15日同日発売!!

名作シリーズがお求めやすく!



『I'll remember you -リアル☆SPiKA／佐坂めぐみ-』

CD盤
1,512円（税込）
ダウンロード版
1,200円（税込）
ハイレゾ版
1,400円(税込)

『英雄伝説 空の軌跡SC Evolution オリジナルサウンドトラック』



CD盤
3,218円（税込）
ダウンロード版
2,400円(税込)
ハイレゾ版
2,700円(税込)

英雄伝説 閃の軌跡 メンタルクロスリンク

著：草薙アキ／イラスト：YahaKo　定価：1,296円（税込）



好評発売中！

お求めは全国書店にて

速報スクープ!

軌跡シリーズ最新作

英雄伝説
閃の軌跡III
センノキセキ スリー

制作決定!

エレボニア帝国の動乱を描く『英雄伝説 閃の軌跡』シリーズ。その最新作となる『閃III』の制作が決定した！　クロウにより暗殺されたかに見えた《鉄血宰相》オズボーン。だが、彼は何らかの方法により生きており、反乱を企てた《貴族連合》はもとより、《結社》でさえ手玉に取り、さらに帝国内での地位を盤石のものとした。そんなオズボーンにより救国の英雄として祭り上げられたリィンの運命は……!?　続報が待ちきれない！

THE LEGEND OF HEROES
暁の軌跡
アカツキノキセキ

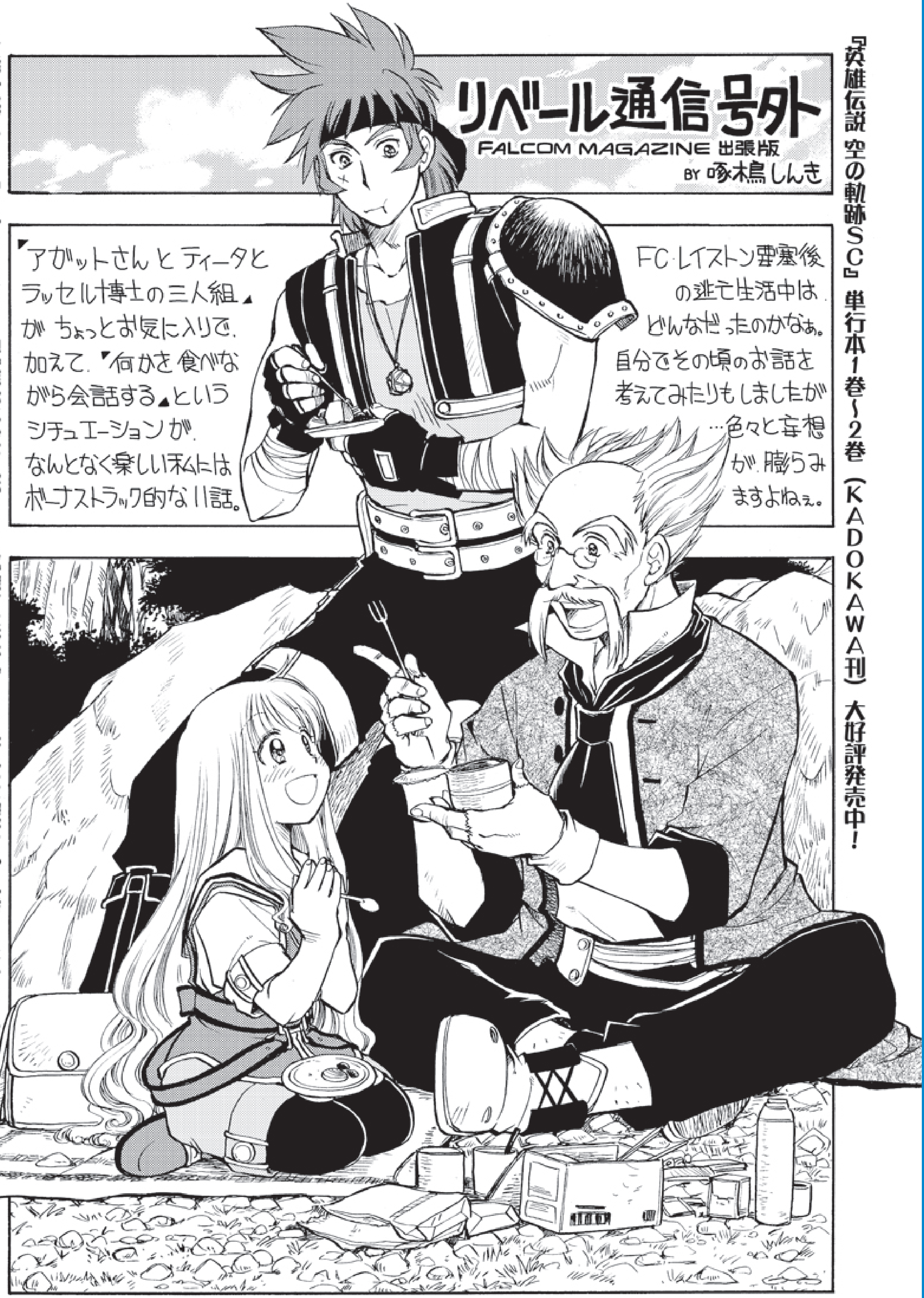
2016年サービス開始決定!!

『軌跡』シリーズ10周年記念作品として発表されたオンラインストーリー RPG『英雄伝説 暁の軌跡』が、2016年にサービス開始されることが決定した。準遊撃士のナハト、クロエら新たなメンバーを主人公に、クロスベル自治州やリベール王国といった、これまでの『軌跡』シリーズの舞台となった地域を始め、新たにレミフェリア公国も訪れることができる期待作。こちらも『閃の軌跡III』同様、続報を期待して待て！



『英雄伝説 暁の軌跡』ティザーサイト http://akatuki.ujj.co.jp/

★無料漫画サイト『コミッククリア』にて『英雄伝説 空の軌跡SC』を連載中の啄木鳥しんき先生が、執筆のこぼれ話をお届けしていきます♪



『英雄伝説 空の軌跡SC』単行本1巻〜2巻（KADOKAWA刊）大好評発売中！

無料漫画サイト コミッククリア　http://www.famitsu.com/comic_clear/



エステル&ヨシュアのファルコム空の軌跡ラジオの舞台裏

ついに発売！　年越しは『空SC Evo』とそららじで決まり！

『空FC Evo』から6ヶ月。ついに『空SC Evo』が12月10日に発売！　今月は発売翌日となる11日と、クリスマスの25日に配信と、年の瀬にぴったりな配信となった。また、第13回の配信で告知していたポスタープレゼントキャンペーンは、合計で15名の方が当選ということに。しっかりとハンドルネームの宛名付きで、神田さんと斎賀さんがサインを一枚ずつ丁寧に書かれていたので、到着するのをお楽しみに！　そららじも第0回の配信から約8ヶ月経ち、来年には『空 3rd Evo』の発売も決定！　ますます面白くなっていくこと間違いなしなそららじを、2016年もよろしくお願いします！



みんな解けるか?! ファルコム検定

毎回『空の軌跡』に関するクイズを出題し、リスナーが"あえてボケる"という、検定とは名ばかりの大喜利コーナー。オリビエの用法容量にはくれぐれもご注意を！



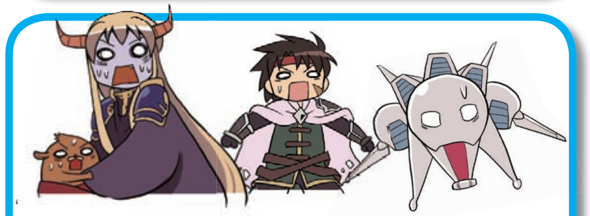
ファルコム ミュージックライブラリー

『めんどくさいラジオ』でも大人気だったこのコーナーは『そららじ』でも継続！　ファルコム作品の魅力溢れるBGMを毎回たっぷりと聴くことができるコーナーだ！



言葉の小箱

『そららじ』の看板コーナーになりそうなこの企画。エステルとヨシュアに自分が考えた掛け合いを喋ってもらえるという、夢のようなコーナーになっているぞ！
　投稿をする時は、どちらのセリフか分かるように書くのが採用率アップのポイント！



あ、あんですって～？！ ファルコムニュース

ファルコム作品の最新情報をお届けするニュースコーナー。思いがけないニュースを聴くことができるかも？

エステル＆ヨシュアのファルコム空の軌跡ラジオ
■配信日　毎月2回（金曜日）更新　ラジオ公式ホームページ、日本ファルコムYoutubeチャンネル、ランティスラジオにて公表配信中
■公式ホームページ　http://www.sora-evo.com/radio/

ナイアル&ドロシーコンビの
今度の取材紀行は『SC』が舞台！



英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット 2

『英雄伝説 空の軌跡』のリベール通信社で働く記者のナイアルとカメラマンのドロシーが繰り広げるリベール取材紀行の第2巻。『空の軌跡SC』の世界を舞台に、凸凹記者コンビのふたりが訪れた街で出会う様々な人々との交流を描いていく。今回はティータやレン、ミュラーといった人気キャラクターも続々と登場。

好評発売中!!

1,300円+税

判型：B6正寸　並製ページ数:304
ISBN：978-4-8021-3004-2
発行元:フィールドワイ　発売元:メディアパル

今度の『空の軌跡』小説は
ナイアル&ドロシーが主役！



英雄伝説 空の軌跡 リベール王国スナップショット

シリーズ累計200万本を突破した、日本ファルコムの大人気RPG『軌跡』シリーズ。その中でも特に人気の高い『空の軌跡』シリーズから外伝小説が登場！　リベール通信社のナイアル&ドロシーの記者コンビが、リベール国内の取材旅行中に出遭った人たちとの触れ合いを描いていく、心温まるハートフルストーリー4篇を収録。

好評発売中!!

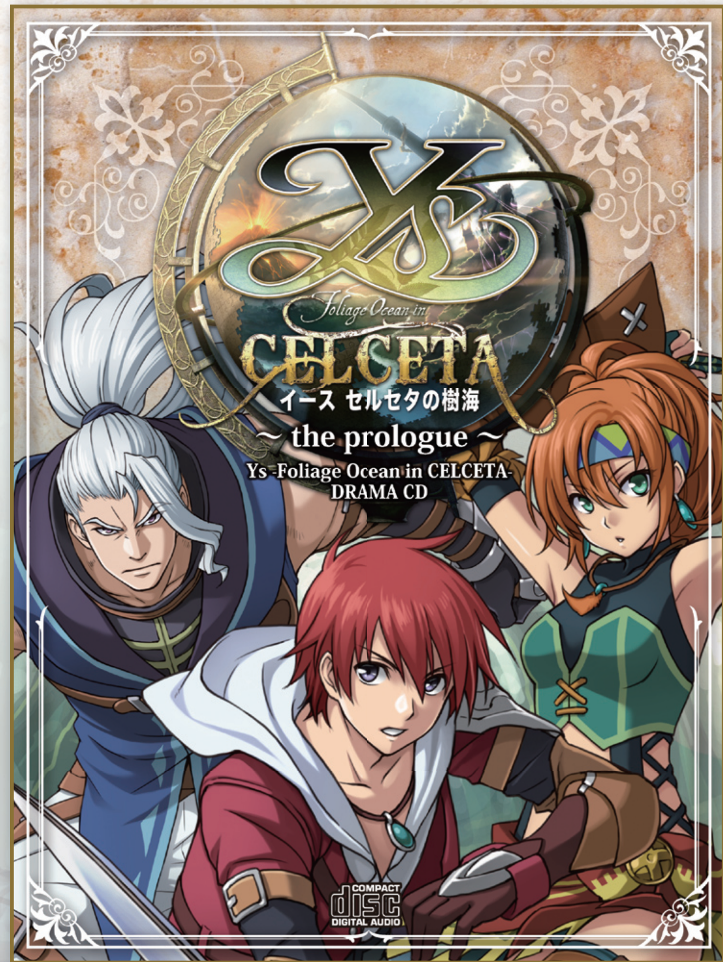
1,200円+税

判型：B6正寸　並製ページ数:296
ISBN：978-4-89610-846-0
発行元:フィールドワイ　発売元:メディアパル

『イースⅧ』発表記念！

ドラマCD イース セルセタの樹海 ～ the prologue ～

シナリオ再収録!



今回は待望の『イース』シリーズ最新作の発表があったことを記念して、2012年に発売された前作『イース セルセタの樹海』のイース生誕25周年パックに同梱されていたオリジナルドラマCDのシナリオを再収録！来年の発売に向けて、今からアドルの活躍を振り返っておこう！

製品情報
■対応機種：PlayStation®Vita、PlayStation®Vita TV　■好評発売中
■価格：3,800円(税込4,104円)　ダウンロード版 4,104円(税込)　■ジャンル：アクションRPG　■プレイ人数：1人
■CERO：B［12才以上対象］　※ドラマCDが同梱された「イース生誕25周年パック」は販売終了しております。

■イース セルセタの樹海 ～the prologue～

【登場人物】
アドル：梶裕貴
デュレン：平田広明
カーナ：石原夏織
アサド：掛川裕彦
レムノス：野島健児
バミー：日野由利加
リーザ：白鳥由里
カンリリカ：小倉唯
レオ団長：阪脩
サンチョ：石川英郎
パンサ：太田真一郎
グリゼルダ総督：金月真美
宿酒場の女将：大腰多佳子
キャスナン鉱員：荒井聡太
コモド住人（仮面の男）：中尾良平
ナレーション：中尾良平

○シーン1
○キャスナンの街／繁華街
SE：にぎやかな街の喧騒＋雨音

アドル「ここはどこだろう……？
僕は……？
僕は……誰なんだ……？」

○キャスナンの街／宿屋
SE：宿屋のBGM

宿酒場の女将「……まったく、珍しいこともあるものね。
ゴールドラッシュに沸く、この町で
まさか行き倒れるなんてねぇ」

アドル「はぁ……助かりました」

宿酒場の女将「まあ、鉱山から金が取れるおかげで、
ウチみたいな酒場も大繁盛してるし。
今日くらい寝る場所は何とかしてあげるよ。
ゆっくりしていくんだね」

アドル「ありがとうございます。
あの……実は、僕、記憶が……なくて……」

宿酒場の女将「あっはっはっ！
見かけによらず面白いお兄ちゃんだね。
悪いけど、そんなこと言っても、ウチでアンタの
面倒は見られないよ」

デュレン「おい、アドル？　アドルじゃないか！」

アドル「え？」

デュレン「やれやれ、街へ戻ってきたなら、
このデュレン様に声をかけろって言ったろ」

アドル「デュレン？　……アドルって誰ですか？」

デュレン「あらら、何の冗談だ？　アドル……
アドル・クリスティン、お前さんの名前だろ？」

アドル「アドル……それが、僕の名前か……」

デュレン「いやー、よく《セルセタの樹海》から
無事に戻ってきたな！
一歩踏み込んだら瞬く間に方角を失い、
脱出する術を失う魔の領域……
てっきり他の山師と同じように、のたれ死んだと
思ってたが……」

アドル「僕は、そんな場所に行ってきたのか……？」

デュレン「お前は、俺の金ヅルだ。
あ……いいや、もとい俺の心の友だ！
本当によく帰ってきた！」

アドル「あ、ああ……（汗）」

デュレン「で、早速だが商売の話だ。
知っての通り、このデュレン様は情報屋だからな。
お前さんの持っている樹海の情報を買わせて
くれねぇか？」

アドル「うーん…………すまない。やっぱり、
なにも覚えていない。
実は、僕には記憶がないんだ」

デュレン「…………は？
……今、何ておっしゃいました？」

アドル「僕には記憶がない。
自分の名前すら、今、デュレンから聞いて
知ったくらいで。
その《セルセタの樹海》というのも、
まったく知らない。
なあ、どして僕は樹海に……？」

デュレン（小声）「……あら、マジかよ。
一体、樹海で何があったってんだ？」

デュレン「いや……アドル、悪いが、
この話はなかったことにしようぜ。
邪魔したな……」

アドル「ちょっ……待ってくれ、デュレン」

デュレン「気を悪くしないでくれよ、アドル。
オレは直感でヤバいって感じた話には
関わらないことにしてるんだ」

SE：「してるんだ」のあたりに、かぶせてドアが激しく開かれる。

鉱員「……た、た、大変だぁっ！
坑道に……坑道に《魔物》が出やがった!!」

デュレン「何だと!?」

SE：ざわつく酒場の客たち。

宿酒場の女将「魔物だって!? それで!?
みんな、逃げられたのかい!?」

鉱員「わからん……皆、自分が逃げるのに必死で……
とにかく、誰でもいい！ 助けてくれ！」

宿酒場の女将「なに言ってるの、こういう時のための
ロムン軍でしょう!?
レオ団長サマは一体なにしてるの!?」

鉱員「そ、それが軍事演習とやらで
今は留守にしてるらしくて……」

宿酒場の女将「こんな時に……!?
本当に役立たずなヤツらだね！」

デュレン「なんだかエラいことになってるみたいだな……」

アドル「酒場のお客さんたち、みんな助けに行くみたいだ」

デュレン「アドル、俺も、ちょっくら行ってくるぜ」

アドル「デュレンも、助けに行くのか？」

デュレン「は？ 騒動が起きたのに、情報屋が様子を
見に行かねぇでどうすんだよ。それじゃあな！」

SE：静かになる。

アドルM「………………
うーん、よくわからないけど……
みんな、困ってるみたいだな。
よし、僕も行ってみよう。
なにか手伝えることがあるかもしれない」

○シーン2

○キャスナンの街／坑道の前の広場

SE：焦燥感のある喧噪。

グリゼルダ総督「何をしているのか？
怪我人はすぐに搬送なさい！」

グリゼルダ総督「鉱員の方たちは点呼を！
まずは全員の安否を確認！」

デュレン「ありゃりゃ、あの姉ちゃんは誰だい？」

鉱員「あの指揮を執っている士官は、
着任したばかりのグリゼルダ総督だ。
今日は駐留軍のレオ団長が留守だから、
総督が出張ってきたらしい」

デュレン「はっはっ、なるほどなぁ……」

グリゼルダ総督「要救助者が3名残されているそうだ。
すぐに突入の準備を！」

サンチョ「え……で、でも……」

パンサ「ボクたち、レオ団長の命令がないと
……」

グリゼルダ総督「いいから早くなさい！
《魔物》を倒す必要はない。
鉱員たちの救助を優先しなさい！」

パンサ「ね、ねぇ、サンチョ兄貴、
団長と総督ってどっちがエライの？」

サンチョ「バカ、総督に決まってるだろ」

グリゼルダ総督「さっさと行きなさい！」
サンチョ「ア、アイアイサー！」
パンサ「ア、アイアイサー！」
※2人の声を重ねます。
デュレン「あのグリゼルダ総督って姉ちゃん、レオ団長より、よっぽどしっかりしてるじゃないか」
鉱員「ああ。兵士たちは頼りないけどな……」
アドルM「うーん、来てみたものの……
あまり手伝えることはなさそうだな……
あれ？　兵士たちが坑道に入っていく。
まだ中に人が取り残されているのか。
大丈夫だろうか？」

アドル「ううぅ……」
アドルM「どうしたんだ、僕は……？
彼らを放っておけない……
このまま見過ごせない……
そんな気持ちが……」

○シーン3
○キャスナンの街／坑道の入り口

アドルM「彼らは……この奥に……」
デュレン「……おい、待て！」
アドル「え？　きみは……デュレンか？」
デュレン「ったく……フラフラと坑道に入ってくのが
見えたかと思えば……
お前さん、一体どこへ行くつもりだ？
アドル！」
アドル「うーん……放っておけなくて」
デュレン「はぁ……
お前さん……
もしかしてアレだろ、アレ」
アドル「アレ？」
デュレン「お人好し！
オレがこの世で一番嫌いな生き物だ。
お人好しなヤツほど周りを巻き添えにするからな。
……ったく、ほらよ！」
アドル「これは……剣（つるぎ）か？」
デュレン「ショートソードだ。
このままお前が野たれ死んだら、
オレの寝覚めが悪くなる。
せめてもの餞別だ。
だいたい丸腰で行くなんて……」

アドル「なるほど……これなら、
なんとなく、使えそうな気がするな」
デュレン「……って、記憶喪失ってことは、
もしかして戦い方も忘れてるとか⁉」
アドル「自信はないけど、なんとかなるよ」
デュレン「真顔で言う台詞かよ⁉
だーっ‼
こうなったら、ついていってやる！
途中までな！
いいか、途中までだぞ⁉」
アドル「はは……お人好しは、デュレンのほうだな」
デュレン「う、うるせぇ、さっさと行くぞ！」
ナレーション「こうして、記憶を失っていながらも

人助けを買って出たアドルと、
お人好し嫌いのお人好しデュレンは、
魔物の潜む鉱山の奥へと向かうのだった」

○シーン4

○キャスナンの街／坑道

サンチョ「お、おい……
パンサ、大丈夫か？」

パンサ「いたた……サンチョ兄貴〜、
ボ、ボク、もうダメみたい」

サンチョ「弱音を吐くなよ。
あとでレオ団長にどやされるぞ」

パンサ「でも……こんなに魔物に囲まれちゃって
……」

サンチョ「ぐぐぐ……」

SE：魔物の咆哮

パンサ「ひぃぃっ……こ、こら！
あっちに行け、行けってば！」

デュレン「あ、おい、アドル！　やばいぞ！」

アドル「ああ！　今、助けます！」

サンチョ「おお！　パンサ、誰か来てくれたみたい
だぞ」

パンサ「お、おたすけ〜！」

アドル「はあぁぁっ!!」

SE：魔物の咆哮

SE：戦闘の効果音

デュレン「ふぅ……
あんまり、たいしたことはなかったな、
アドル」

アドル「そうだな、デュレン」

パンサ「ボク、あの世が見えた！　確実に見えた
よっ！」

サンチョ「お前はちょっと大げさなんだよ……
ところで、あんたたちは？」

デュレン「通りすがりのお人好しと、情報屋だ」

アドル「あの……その様子だと、いったん退いた
ほうが
いいんじゃないですか？」

パンサ「サンチョ兄貴ぃ、ボク足も痛いし、
お言葉に甘えてそうしようよ〜。
やっぱり、ボクには兵士なんて向いてな
かったんだ」

サンチョ「う〜ん……こいつがこんな調子じゃ、
確かにそうしたほうがよさそうだな。
あんたたちも、あまり無理しないでくれ」

アドル「はい、ありがとうございます」

パンサ「そ、それじゃあね〜！」

○シーン5

○キャスナンの街／坑道の奥

デュレン「う〜ん……ここは……
周りの様子が変わったな。
どうやら、古い遺跡につながったようだ
が……」

アドル「鉱山の奥が、遺跡に？」

デュレン「そういうことがあるらしいぞ」

SE：ボス魔物の咆哮

アドル「デュレン、危ない！」

デュレン「うおっ⁉　出やがった……」

アドル「なんとなく、感じる……強そうだ……」

デュレン「こいつが騒ぎの犯人か⁉」

SE：ボス魔物の咆哮

アドル「戦うしかないみたいだな」

デュレン「アドル、来るぜ！」

戦闘ボイス（SEやかけ声などを合わせて）

SE：ボス魔物の断末魔

デュレン「ひゅぅ、何とかなるもんだ」

アドル「ああ、よかった」

デュレン「それにしても、アドル……
なかなか大した腕前じゃないか。
記憶を失ったとはいえ、
さすが樹海で生き延びただけあるな」

アドル「自分でも驚いたよ」

デュレン「お前な……そんな状態で、よくここに
飛び込む気になったよな。
勘弁してくれ、むちゃくちゃだぜ……」

アドル「そうしなければいけない気がしたんだ」

デュレン「お前さんみたいに、お人好しで無鉄砲な
ヤツは
長生きしねぇぞ」

ナレーション「鉱山の奥で魔物を倒し、
取り残されていた人たちや、
傷ついた兵士たちを助けたアドルとデュ
レンは、
外に出るなり、大勢の歓声を受けた」

○シーン6

○キャスナンの街／坑道の入り口

SE：歓声

デュレン「な、なんだなんだ？　お祭りか？」

鉱員「いや～、よくやった！
仲間を助けてくれて、ありがとよ！」

アドル「いえ、そんな……」

グリゼルダ総督「ご苦労だったな。
貴殿が報告にあった赤毛の若者か……
私はセルセタ総督のグリゼルダだ。
以後、お見知りおきを願おう。貴殿の名
は？」

アドル「アドル・クリスティンです」

グリゼルダ総督「アドル……優しさと勇ましさを
兼ね備えた良き名だ」

アドル「あの……この騒ぎは？」

グリゼルダ総督「皆、鉱山長たちを助けてくれた貴殿らの
帰りを待っていたようだ」

アドル「みんなが、僕たちを……⁉」

グリゼルダ総督「さて、まずは鉱員たちと、わが軍の兵士
を助けてくれて礼を言おう。
是非、貴殿らとは、ゆっくりと話をした
いものだが……」

SE：歓声

グリゼルダ総督「これ以上、騒ぎを大きくするわけには
いかぬ。二人とも総督府まで来てもらえ
ぬか？」

SE：歓声をフェードアウト

○シーン7
○セルセタ総督府／総督の私室

グリゼルダ総督「――それにしても、面白い偶然も
あったものだ。
東のエステリアという地方に長年、嵐に
囲まれた
謎の島があったのだが……
そこを解放した人物も赤毛の若者だった
と
いうではないか」
デュレン「そういえば、少し前に、宿酒場でも
そんな情報があったな。
アドルも赤毛だよな……」
アドル「そうだけど……
何度も言うようだけど、僕はなにも覚え
てないんだよ、
デュレン」
デュレン「そうだよな。
……まあ、まさかな」
グリゼルダ総督「とにかく、アドル。デュレン。
貴殿たちには改めて礼を言おう。
そして、それとは別件になるのだが、
もう一つ聞いてほしい話があってな……」
アドル「なんですか？」
グリゼルダ総督「ここから北西に広がっている
《セルセタの樹海》を知っているか？」
アドル「うーん……
知っているような知らないような……」
グリゼルダ総督「何だ、どちらなのだ？」

デュレン（小声）「アドル、話がややこしくなるから、
知らないことにしておけ」
アドル（小声）「そうだね」
グリゼルダ総督「まぁ、いい……
《セルセタの樹海》に、ひとたび足を踏み
入れれば、
たちまち方角を見失うと言われている。
凶悪な獣も数多く生息しており、
生還できる者がほとんどいない場所だ
……
故に我が軍も、その開拓には二の足を踏
んできた。
しかし、本国から新たな鉱脈を発見せよ
という
命令があってな」
デュレン（小声）「軍人ってのも、意外と大変だな」
アドル（小声）「そうみたいだな……」
グリゼルダ総督「そこでだ！ アドル・クリスティン、
貴殿の腕前を見込んで頼みたい。
《セルセタの樹海》の地図を作っては
もらえまいか？」
アドル「地図ですか？」
グリゼルダ総督「ああ。誰も踏み込めない場所だけに、
未だ樹海の地図というものは存在しない。
隅々まで探索して、地図を作成してほし
いのだ」
デュレン「おいおい、たしかに、地図がありゃ、
迷うこともないだろうけど、
生きて帰れないって言われてる場所だ
ぜ⁉」
グリゼルダ総督「もちろん命がけになる分、
相応の見返りを用意するつもりだ。
明日、正式な告示を行うが、地図を完成
して収めた者には高額な褒賞金を与えた

いと思う」

デュレン「高額って……
一体どれくらいになるんだ？」

グリゼルダ総督「区域ごとに分けるつもりだが、
合計で3000万ゴールドの予定だ」

デュレン「ヒュー……
そいつぁスゲーな」

アドル「うーん……
ちょっと考えさせてもらっていいです
か？」

デュレン「たしかに、ヤバイ感じはするよな」

グリゼルダ総督「うむ……
危険があるのは間違いあるまい。
よく考えて……明日にでも返事を聞かせ
てほしい」

アドル「わかりました」

デュレン「じゃあ、俺たちは、このへんで」

グリゼルダ総督「ああ……ご苦労だった」

アドル「失礼します」

SE：ドアを閉める

○シーン8

○セルセタ総督府／廊下

デュレン「ふぅ～地図か……
樹海はヤバイよなあ……
でも、3000万ゴールドかぁ～」

アドル「ん？ 誰だろう、あのヒゲの大男は？」

デュレン「え？ あれは……」

レオ「ぬぬ～～？
もしかすると貴様は鉱山で《魔物》を倒
したという赤毛の剣士ではないか？」

アドル「たぶん、そうです」

レオ「フン、やはりそうか……
なぜ分かったか知りたいか？
それはオレ様が天才だからだ」

デュレン（小声）「おい、自分のこと俺様だってよ
……」

アドル（小声）「それ、デュレンも言ってたよ
……？」

レオ「オレ様の名は、レオ！
セルセタ駐留軍の団長だ。
オレ様が留守の間にちょっと活躍したか
らって　いい気になるなよ。
オレ様がいれば、お前なんかより迅速か
つ芸術的に　解決してたに違いない
のだ。
わーはっはっはっ！
わーはっはっはっ！
わーはっはっはっ！」

※笑いながら遠ざかっていく。

デュレン「笑いながら行っちまったぞ……？」

アドル「変わった人だったな」

デュレン「……あれがある意味、キャスナンいち有
名な
レオ団長だ。
アドル、お前さんといると、濃いヤツば
かりに
絡まれるなぁ」

アドル「はは……デュレンもね」

デュレン「まぁ、いい……酒場に戻ろうぜ。
あそこの二階に泊まってるんだろ？」

アドル「ああ、寝る場所は何とかしてくれるって
言ってたな」

○シーン9
○キャスナンの街／宿屋
ＳＥ：宿屋のＢＧＭ

デュレン「あー、この世に生まれて以来、
一番長い一日だった気がするぜ……」
アドル「たしかに、疲れたな」
デュレン「それで、アドル……
総督の頼みごとは、結局、どうするつもりなんだ？」
アドル「まだ決めていないけど？」
デュレン「何だ、悩んでるのか？
まあ、お前さんはロムン軍のヤツらと相性いいとは
思えないが……」
デュレン「……………………
アドル……
一つ提案させてもらっていいか？」
アドル「なんだい、デュレン？」
デュレン「お前さん、俺と組んで地図作りを引き受けてみないか？」
アドル「え？　デュレンと二人で？」
デュレン「そう意外そうな顔をするな。
情報屋が地図を売るのは、おかしくねぇだろ？」
アドル「ひょっとして、褒賞金が目当て？」
デュレン「はは！　さすがにバレるか。
だが、そうだとしても、お前さんにとっちゃ悪い話じゃないと思うぜ？」
アドル「どうしてだ？」
デュレン「俺は一儲けしたい。
アドルは記憶を取り戻したい。そうだろ？」
アドル「ああ」
デュレン「お前は樹海に行って記憶を失った。
だとすれば、取り戻すには、もう一度樹海に行くしかないんじゃないか？」
アドル「ふむ……なるほど……」
デュレン「そのついでに地図を作れば、ロムン軍に売れる」
アドル「たしかに、悪い話じゃなさそうだ」
デュレン「ふふん、商談成立だな」
アドル「上手く乗せられている気もするけどね」
デュレン「いいじゃねぇか。
この際だ、乗せられとけよ！　アドル」
アドル「はは……わかったよ、デュレン」
アドルＭ「《セルセタの樹海》か……
そこで、いったい何があって、僕は記憶を失ったんだろう？」

ナレーション「翌朝……
総督府を訪れたアドルとデュレンは、
グリゼルダ総督に、地図作りを引き受けると伝える。
そして、樹海探索へと旅立つのだった。」

○シーン10
○コモド

デュレン「はー、こいつは……スゲェな……
でっかい樹の上に村がありやがる……」
アドル「ああ……本当に大きな木だ」
デュレン「アドル、以前に、ここへ来た覚えはないのか？」
アドル「うーん……

デュレン「そうか。もし来てるなら、知り合いがいるだろうから、話が早いんだがな……」
アドル「うん。とにかく行ってみるとしよう」
デュレン「おう、鬼が出るか蛇が出るか……」

○コモド／門

デュレン「おっ、門番みたいのがいるぞ。こんちゃ〜っす！」
アドル「こんにちは」
コモド住人「ん？ なっ!? 貴様は……!! この前やってきた、赤毛の異邦人ではないか！」
デュレン「何だ、やっぱりお前さん、ここへ来たことあるみたいだな、アドル」
アドル「ああ、そうらしい」
デュレン「知り合いなら、ちょうどいい。わりぃけど、中へ案内してもらえないか？」
コモド住人「バカな！ 何の冗談だ!? よくもそのような口を利けるものだ。貴様が森の神の怒りに触れたというのに！」
デュレン「な、何だぁ!? ずいぶん、お怒りのようだが……」
デュレン（小声）「おい、アドル。お前さん、何かやったワケ？」
アドル（小声）「うーん……覚えてないが……」
コモド住人「森の戦士の名に懸けて、今、この場で始末してくれる！」

SE：剣を抜く音。

デュレン「ちょ、ちょっと待ってくれ……こっちの話も聞いてくれや！ こいつは、ここに来たこととか、自分のことを何も覚えちゃいないんだ！ だから、記憶を取り戻したくて、ここへ来たんだよ!!」
コモド住人「覚えていない、だと……そんな言い訳が通用するはずないだろ!! バカにしているのか!?」
デュレン「う……火に油を注いじまったみたいだ」
アドル「デュレン、さがってくれ。どうやら、僕は恨みを買ってるみたいだ……」
デュレン「おい、アドル!?」
コモド住人「いくぞ、赤毛の異邦人！」
カーナ「やめなさい！」
コモド住人「カ、カーナ……？」
カーナ「……記憶を失った？ あたしが知ってるアドルは、そんな都合のいいウソをつく人間ではなかった。アドル、あたしのことも忘れてるっていうの!?」
アドル「えっと……君は……」
カーナ「……あたしと初めて会った時のこと……覚えてないの？」
アドル「……すまない」
カーナ「アドル、あなた……あたしが獣と間違って狩りそうになった時にも謝ったわ。紛らわしくてごめん、って」
アドル「そうなのか？」
デュレン「そいつは、いかにもアドルらしいな」

カーナ「ふふ……
記憶がないと言っても、やっぱり、アドルね。
その目……
曇りがないというか、バカに素直というか……
相変わらず、樹海を行き来できる屈強な剣士には
見えないわね」

コモド住人「カーナ、お前……
こいつらの言うことを信じるのか？」

カーナ「んー……今は何とも言えない。
ただ、どっちにしても彼らの話を聞く必要があるわ」

コモド住人「この時期に集落に入れるのか⁉」

カーナ「みんなが焦っている気持ちは、とてもよく分かる。
あたしの家も同じだから……」

コモド住人「あ……
そ、そうか、お前のところも……」

カーナ「でも、大変な時だからこそ、
心を静めてどっしり構えましょう。
コモドを守ってくれている、この大樹のようにね。
そうでないと大切な判断をすることは出来ないわ」

コモド住人「そうだな、すまない……」

カーナ「中へ案内するわ、アドル……
それと……？」

デュレン「俺はデュレン。よろしく頼むぜ」

カーナ「私は、カーナよ」

SE：木の門が開く音。

○シーン11
○コモド／部屋

カーナ「紹介するね。こちら、あたしのお父さん。」

アサド「……アサドだ。
この集落の長を務めている。
アドル、お前とは一度、会っているのだがな……
カーナから聞いたのだが、記憶を失ったそうでは
ないか？」

アドル「少しずつ思い出してるとは思うんですが
……」

アサド「ふむ……
願わくは、お前が知っていたことを
教えてほしかったのだが……」

アドル「すみません……
僕は、いつここへ来たんでしょうか？」

アサド「2週間ほど前だ……
樹海の外から人が訪れるとは
前代未聞の出来事だったのだが……
今、この集落には、その時以上の騒ぎが起きている」

アドル「騒ぎ、ですか？」

カーナ「今、この集落では《神隠し》が起きてるの」

デュレン「……《神隠し》？」

カーナ「住人が、ある日、こつ然と姿を消してしまって、どこへ行ったのか分からない
……続いて一人、また一人と消えて、
誰一人として戻ってこないの」

アサド「最初の事件が起きたのは、
アドルが、このコモドを去った直後だ」

デュレン「なるほど……
そりゃあ、アドルが真っ先に犯人扱いさ

れるワケだ」

アドル「たしかに……」

アサド「アドルは集落が始まって以来、初めての来訪者だったのだ……お前が去った後に異変が起きれば、当然、疑う者が出てくる。あの赤毛の異邦人が森の神を怒らせたのだ、と言ってな」

デュレン「そりゃあ、無理もない話だぜ」

カーナ「今、住人たちは交代で寝ずの番を続けながら　警戒してるの。だから、苛立っている人も多くて……」

アドル「なるほど……わかりました。僕は犯人を突き止めようと思います」

カーナ「えっ!? それは……たしかに、犯人が見つかれば、アドルへの疑いは晴れるし、あたしたちもうれしいけど……」

アサド「何となく、お前なら、そう言いそうな気がしていた。だが俺の立場から言わせてもらえば、もうしばらくはここにいてくれ」

アドル「なるほど……」

デュレン「しばらくって、いつまでだ？」

アサド「明け方には森の捜索が終わる」

デュレン「朝まで何も分からなければ、どうなるんだ？」

アサド「その時、考えさせてもらう。明日の朝まで、この部屋にいてくれ……カーナ、行くぞ」

カーナ「あ、う、うん……アドル、あとで食事は持ってくるからね」

アサド「そういえば、アドルよ……あいつの……レムノスのことも覚えていないのか？」

カーナ「お父さん……!!」

アドル「レムノス……ですか？　うーん……」

アサド「やはり、覚えていないか……もし、何か思い出したなら、声をかけてくれ」

SE：扉が閉まる音。

ナレーション「アサドやカーナは友好的だったが、集落の住人たちはアドルとデュレンを神隠しの犯人ではないかと強く疑っていた。結局、アドルたちは縄で縛られてしまうのだった」

デュレン「やれやれ、すっかり犯人扱いだな」

アドル「いや。まだわからないと思っているからこそ、逃げないように縛ったんだろう。アサドさんや、カーナが説明してくれたおかげだ」

デュレン「たしかに、門番の男は剣を抜いてたもんな。あのカーナってのが、とめてくれなかったら　どうなっていたやら……」

アドル「俺たちが神隠しの犯人じゃないとわかれば、この縄だって解いてくれるさ」

デュレン「ふぅ～……
逆に言えば、朝までに何もわからなければ、
アドルが犯人ってワケかよ……」

アドル「そういうことになるのか？」

デュレン「この手の事件に決着をつけるには、
犯人が必要だからなぁ」

アドル「なるほど」

デュレン「落ち着いてるじゃねえか。
やってもいないことの犯人にされていいのかよ!?」

アドル「たしかに、集落の人たちを連れ去ったなんて
覚えはないけど……
やってないって記憶もないからな……」

デュレン「ああ……そういうことか……はぁ～。
そういや、最後に聞かれたレムノスってのは何なんだ？　人の名前か？」

アドル「うーん……
すこし前に、竪琴を引く青年を夢で見たんだ……
そのことを、今、ふと思い出した」

デュレン「そいつが、ここの人間かもしれないんだな？」

アドル「何かきっかけがあれば、もっと思い出せるかもしれない……
いずれにしても、ここで待っているだけでは、
事件を解決できないと思う」

デュレン「同感だ。なんせ、２週間前から起きてる事件なのに、ここの住人は、犯人の目星もつけられてないんだ。
明日の朝までに都合よく何か発見できるとは思えないぜ。
…………逃げるか、アドル？」

アドル「いや……
でも、情報は集めたい」

デュレン「よし。少し待ってろ……
こんな縄くらい、どうにでもなる。
武器も道具もそのままだしな」

アドル「うん……
あのアサドという人は、俺たちのことを
縄で縛ったり、
ここで待ってるように言ったけど……
それは集落の住人たちを安心させるためで、本当は
もしかしたら……」

デュレン「どうだろうな？　おしっ、ほどけたぜ」

アドル「もう縄を抜けられたのか？　たいしたもんだ……」

デュレン「危ない橋は渡らない主義だが……
情報屋をやっていれば、こういうのが必要な時も
あるからな」

○シーン12

○コモド／回想

ナレーション「大樹のうえに広がる集落――
アドルとデュレンは、そのコモドのなかを　人目を避けつつ探索した。
その結果、アドルはわずかに記憶を取り戻す。
初めて、この集落を訪れた２週間前のことを　　思い出すのだった」

レムノス「君の名前は、アドルというのか。
オレはレムノス。

姉のカーナがいきなりナイフを投げたりして……
失礼なことして、すまなかった」

アドル　「いや、まぎらわしかった僕も悪かったと思う」

レムノス　「そう言ってもらえると……
まったく、動くものを見たら咄嗟に攻撃するなんて、
どっちが獣か分かんないよな」

カーナ　「わ、悪かったわよ……
いきなり狩ろうとして」

アサド　「一歩樹海に立ち入れば、
そこは獣たちがひしめく弱肉強食の世界……
カーナのように神経を研ぎ澄ませなければ
生き抜けまい。
もっとも、剣一本で樹海を抜けてきたアドルには、
無用の説法だと思うがな」

カーナ　「そうそう、頼りなさそうに見えて、
剣の腕はかなりのものよ？
ねえ、アドル、今度は正々堂々と勝負して
みましょう！」

アドル　「いや……それは……」

レムノス　「姉貴……お客さん、引いてるよ？」

カーナ　「え、な、なんで⁉」

アサド　「アドル……
こいつらは双子の姉弟でな。
カーナは男衆以上に狩りや戦いの技に秀でている。
レムノスのほうは手先が器用で、
楽器の演奏や細工物が得意だ。
このコモドを案内するのに、二人なら
うってつけだろう」

アドル　「ありがとうございます」

アサド　「何、礼には及ばん……
それでは二人とも、よろしく頼むぞ」

カーナ　「分かりました、父さん！」

レムノス　「どもども、よろしく」

カーナ　「こっちに来て、アドル！　早く、早く！」

ナレーション　「初めてコモドを訪れたアドルは、
カーナとレムノスに集落を案内してもらった。
樹海を彷徨った疲労を忘れるほど充実した日々は、
瞬く間に過ぎていくのであった」

SE：竪琴の演奏。

レムノス　「……この曲は昔、樹海にあったっていう
幻の王国を偲(しの)んで作られたらしい」

アドル　「いい曲だな。それに、演奏もよかったよ、
レムノス」

レムノス　「ありがとう。竪琴は得意なんだ。
それにしても……
もう出発しちまうなんて、アドルはせっかちだな」

アドル　「他にも見てみたい場所があるからね」

レムノス　「あいにく、親父と姉貴は、毎日、
この時間は狩りに出ててな」

アドル　「そうなのか。
僕も暗くなる前に進んでおきたいし、
仕方ないな……
また来ると思うから、気にしないでくれ」

レムノス　「ああ、親父と姉貴には、
しっかり伝えておくからよ」

アドル　「そういえば、レムノスは狩りに出ないのか？」

レムノス　「オレが狩りに？

ははは……ケガでもしたら、竪琴が弾けな
くなっちまうよ」

SE：草木の揺れる音。ガサガサ！

レムノス「――ん？」

アドル「どうした、レムノス？」

レムノス「誰だ、アレ？　仮面をつけた男が……
あっ……!?」

SE：草木の揺れる音。ガサガサ！

アドル「森の奥に走っていったな。
ずいぶん、素早かったけど」

レムノス「ああ、誰だろう……？」

アドル「狩りをしている人じゃないのか？」

レムノス「いや、そんなはずはない……
狩場になっている森は、この辺りじゃ
ないはずだ……」

アドル「レムノスの知り合い？」

レムノス「集落の人間には間違いないと思うが……
でも、あれは……
あの妙な仮面は、いったい……？」

ナレーション「断片的にだが、記憶を取り戻したアドル。
仮面の男が消えた森を見つめるレムノス
の顔が、
とくに鮮明に思い出されたのだった」

○シーン13

○コモド／探索

アドル「ううぅ……」

デュレン「おい、アドル……大丈夫か？」

アドル「ああ……」

デュレン「どうやら、何か思い出したようだな？」

アドル「ああ……
初めて、このコモドに来たときのことを
ね。
僕はレムノスと会っていたみたいだ……
あと、すこし気になることも……」

カーナ「あー!!
アドル、見つけたわよ！」

アドル「あっ、カーナだ」

デュレン「げげっ、見つかっちまったか」

カーナ「ちゃんと縄で縛っておいたのに、どう
やって　ほどいたの!?」

デュレン「いや、それは……」

カーナ「今度あたしにも教えてよね！」

デュレン「おいおい……」

アドル「すまない、カーナ……
やっぱり、僕も事件について調べたくて。
レムノスが見た仮面の男……
何か関係があるのかもしれない」

カーナ「えっ!?
アドル、もしかして、記憶が戻ったの!?」

アドル「うん、全部ではないけど……」

アサド「仮面……だと？
詳しく聞かせてもらおうか、アドル」

カーナ「あっ、お父さん」

アドル「さっき思い出したところなんですが……
レムノスが、妙な仮面の男を見つけたん
です。
コモドの住人だと言っていました」

アサド「ふむ……
魔除けとして仮面を部屋の中に飾る
風習はあるが……」

アドル「いえ……そうした仮面と同じならレムノ

スは
妙な仮面とは言わないと思うんです」
アサド　「なるほど」
カーナ　「ん～……妙な仮面、ねぇ？」
デュレン　「よし、ここは手っ取り早く、本人に話を聞いてみるとしようや。なあ？」
アドル　「そうだね」
アサド　「む…………」
デュレン　「……どうした？」
カーナ　「レムノスは、ここにはいないわ」
デュレン　「何だ、どこかに出かけてるのか？」
カーナ　「いえ、集落から姿を消したのよ。アドルを見送った、その日のうちに……」
アドル　「何だって⁉ レムノスも《神隠し》に遭ったっていうのか……⁉」
アサド　「……アドル、教えてくれたことについては感謝する。だが、お前の話を丸ごと信じていいものかどうか……」
アドル　「そうですね……」
SE：外から剣撃の音と怒号が聞こえてくる。
デュレン　「おい、何の騒ぎだ⁉」
カーナ　「父さん、この音は……⁉」
アサド　「カーナ、行くぞ！」
カーナ　「はい！」
SE：アサドとカーナの駆け足
デュレン　「一体、何があったっていうんだ？」
アドル　「様子を見に行こう、デュレン！」
デュレン　「はいはい、今回ばかりは賛成だぜ」

○シーン14
○コモド／外・襲撃
SE：剣撃の音がさらにクリアに聞こえてくる。
アドル　「あれは！」
デュレン　「カーナたちと睨み合ってる連中、仮面をかぶってるぞ」
アドル　「あの仮面は……」
カーナ　「あなたたち……これは一体何の真似なの⁉」
仮面の男　「ふぅ、ふぅ………ふおっ‼」
アサド　「下がれ、カーナ‼」
SE：剣を剣ではじく音。
カーナ　「父さん‼」
SE：剣の斬り合い、3回ぶんくらい。
仮面の男　「ふん！　ふん！」
アサド　「ぬ……強い……⁉」
カーナ　「そんな、あの父さんと互角に渡り合うなんて……⁉」
アサド　「おおおぉぉぉ、せいっ‼」
SE：エフェクトまじりの剣戟音。
アサド　「皆は下がっていろ……‼ こいつらの力、尋常ではない！」
カーナ　「う、うん！」

デュレン「おお、やるな。押し戻したぜ！」
アドル「あの仮面の男から感じられるオーラは
いったい……？」
デュレン「アドル、もしかして
お前さんとレムノスが見たっていう……」
アドル「うん。そうだと思う」
デュレン「やはりか……しかし……
一体何が起きていやがる？」
アドル「あの人たちは、格好からして、コモドの
住人だ。
どうして、自分たちの集落を襲撃するん
だ？」
デュレン「ん？ あらら、アドル……
連中、増援がいるみたいだぜ！」
アドル「ああ……
まずいな、アサドさんが囲まれた」
アサド「お前たち……
姿をくらませていた連中なのか？
一体なぜ……」
レムノス「ふぅ…………………………」
※無言のままオーラをまとうレムノス（仮面）。
力を込める感じの呼吸で。
デュレン「おい、あの仮面の男……
ひときわ、すごそうだぜ」
アドル「ああ、すごいオーラだ」
アサド「……答えられぬか。
いずれにしても、この集落の者を傷つけ
た以上……」
SE：剣の音。

アサド「……狩らせてもらうぞ！」
アサド「ずあっ！」
レムノス「ふんっ！」
SE：剣を振る。
SE：剣をはじく。
アサド「ぬっ!? お前は……!?」
カーナ「父さん!? 大丈夫なの!?」
アドル「行こう、デュレン！
どうやら、見ている場合じゃなさそう
だ！」
デュレン「仕方ねぇな……
おい、おっさん！ 助太刀するぜ!!」
カーナ「アドル、デュレン……!!」
アサド「ぬっ……お前たち、手出しは無用だ」
アドル「しかし、アサドさん……」
デュレン「勝てるのかよ!?」
アサド「いいから、下がっていろ。
これは……この集落の問題だ。
そして、こやつは……
こやつだけは……俺が……
ぬあああぁぁぁ〜〜〜!!」
レムノス「おおおぉぉぉ〜〜〜!!」
SE：何度かの斬り合い。
アサド「ぐあっ……!!」
カーナ「っ…………父さん！」
アドル「あっ！ 仮面の男たちが！」
デュレン「くそっ……逃げやがったか。

追いかけるか、アドル⁉」

アドル「いや。あの身のこなしは、かなりこの森に慣れてる。僕たちでは追いつけないよ」

デュレン「なるほど……しょうがねぇな」

ナレーション「その後、カーナは集落の負傷者たちを手当し……
アドルたちは周辺の見回りをしたが、仮面の男たちが再び襲ってくることはなかった。
深手を負わされてしまったアサドの治療は
夜を徹して行われた……」

○シーン15

○コモド／アサドの寝室

アサド「うっ…………」

カーナ「父さん……！」

アサド「カーナ……ここは……？」

カーナ「安心して、あたしたちの家よ」

アサド「そう……か……すまないな……」

アドル「……アサドさん、気がついてよかった」

アサド「アドル……」

カーナ「父さん、神隠しはアドルたちと関係ないわ。
だから……」

アサド「うむ……わかっておる……」

デュレン「なあ、あの仮面の奴らは、
やっぱ《神隠し》に遭った連中なのか？」

カーナ「多分……」

デュレン「多分？　違う可能性もあるってのか？」

カーナ「父さんはコモドの戦士として、集落では
間違いなく
最強なのよ。
その父さんをあの仮面の男は明らかに
上回っていたわ。
そんなに腕が立つ人なんて……」

デュレン「……消えたヤツの中には、いないってワケか」

アドル「彼らの目的はなんだろう？
アサドさんに手傷を負わせたあと、姿を
消して、
それっきりだなんて」

カーナ「それこそ、あたしたちにはワケがわからないわ……
同じ集落の仲間のはずなのに……」

アサド「カーナ……あの仮面の男に……
……手を出すな……」

カーナ「え……
ど、どうして、父さん？」

アサド「……俺の傷が……癒えるまで……
あれは……あの男は……
……………………」

カーナ「……父さん⁉」

アドル「カーナ、大丈夫だよ、眠っただけだ」

カーナ「う、うん……」

デュレン「体力が回復するには、まだ時間が必要なんだろ」

カーナ「父さんは何を言おうとしたのかしら
……」

アドル「戦ったときに、なにか気づいたことがあったのかもしれない」

カーナ「そうね……
目が覚めるのを待って、聞くしかないわね」

デュレン「さて、アドルよ……俺たちはどうするのかね？」

アドル「アサドの治療をしているとき、
森の捜索に行った人たちに話を聞いてみたんだ」

デュレン「お前さん、姿が見えないと思ったら、
そんなことしてたのか」

アドル「仮面をつけた男を、この集落より樹海の奥にある《千古の巣穴》という場所で見かけたらしい」

カーナ「《千古の巣穴》⁉　そんなところに……」

デュレン「ふう……
やっぱり、まだ関わる気かよ」

アドル「ああ、すべてを覚えているわけではないけど、
前に来たとき、カーナやレムノスには
集落を案内してもらったり、
アサドさんにはよくしてもらったんだ。
放ってはおけない」

デュレン「やれやれ、仕方ねえな」

カーナ「あたし、行ってみる！」

アドル「カーナ……⁉　まさか《千古の巣穴》に？
でも、君は、お父さんが……」

カーナ「あとは安静にしてるしかないわ。
あたしは仮面のヤツらを調べようと思う。
待ってるだけなんて……やっぱ性に合わないのよね」

アドル「そうだとしても、危険だ」

カーナ「あたしたちの中で一番強い父さんが
負けちゃったのよ？
ってことは今度襲撃を受けたら、あたしたちにはもう　防ぎようがない。
だったら、仮面の男たちの居場所へ行って、先に対処の手がかりだけも」

アドル「うーん……カーナの言うことは、もっともだけど」

カーナ「どうするか決められないまま、
時を過ごすのは苦手……
例え間違ってもいいから、あたしは
行動することを選ぶわ」

アドル「ふぅ……
わかったよ。
たしかに、樹海の道案内は欲しかったし」

カーナ「フフ、ありがと」

デュレン「何と言うか、まあ……
大したお嬢ちゃんだぜ……」

ナレーション「アドル、デュレン、カーナの3人は、
樹海の深くにある《千古の巣穴》へとたどり着く。
そこは、仮面をつけた者たちの隠れ家になっていた。
やはり、彼らはコモド集落の住人であり、
どうやら
仮面に操られているだけらしかった。
アドルたちは、集落の人々を助けつつ、
先へと進むのだった」

○シーン16

○千古の巣穴／レムノス戦

ＳＥ：竪琴の曲

デュレン「おい、アドル……奥から、なにか聞こえないか？」

アドル「ああ……これは、竪琴の音……？
しかも、聞き覚えのある曲だ」

カーナ「っ!!
……あたしは小さい頃から
この曲を聞いて育ってきた……
間違いない。
この音色……レムノスの竪琴だわ！」

アドル「ああ、そうだと思う。急ごう！」

カーナ「うん！
レムノス……今行くわ」

ＳＥ：足音

アドル「っ!? 仮面の男が、竪琴を……!?」

カーナ「これは……どういうこと？」

デュレン「あいつは、集落を襲撃して、カーナの親父さんを斬ったヤツじゃねぇか！」

カーナ「そんな……
父さんを傷つけたのはあなたなの……？
――――レムノス!!」

レムノス「ふぅ……………………!!」

ＳＥ：オーラをまとう。

アドル「また、オーラが全身をつつみこんで……
アサドさんがやられたときと同じだ」

デュレン「フン……やる気かよ？」

アドル「下がるんだ、カーナ！」

カーナ「アドル……
あれは、レムノスなの！」

アドル「ああ、でも今は操られてる。
ここにいた他の人たちと同じだ！」

レムノス「おおおぉぉぉ……!!」

デュレン「来るぞ、アドル！ カーナ！」

カーナ「くっ……
レムノスなのに！」

アドル「今は、戦うしかない！」

ＳＥ：バトルの効果音

○シーン17

○千古の巣穴／バミー戦

デュレン「ハァハァ……何とかなったか……
だが、こいつは他のヤツと比べると
別格の強さだったぜ……」

アドル「ああ……
レムノスは剣なんて苦手だったはずだけど……
とにかく、仮面を外そう」

カーナ「あたしがやるわ……」

アドル「っ!? カーナ、待つんだ！
なにか、光って……」

ＳＥ：転送魔法の効果音

バミー「ウフフ……」

アドル「なにもないところに、急に人が現れた!?」

カーナ「ど、どういうことなの!?」

デュレン「また妙なヤツが出てきたぞ？
転移魔法ってやつか……
こいつも、コモドの住人……ってことはなさそうだな。
見るからに」

バミー「実験は成功ね……
仮面の力は十分に分かったわ」

カーナ「……あなた、誰なの!?」

バミー「誰？ あなたたちに答える筋合いはないのだけれど……」

まあ、いいわ……
今日の私はすこぶる機嫌がいいの。
私の名前はバミー……
心の闇をついて人を操る《魔道師》よ」

アドル　「魔道師……人を操るだって……?
それが、仮面の力なのか?」

魔道師バミー「そう女性を急かすものではないわ。
彼を操っているのは仮面ではなく、
私の魔法よ……ホラ、このように……」

SE：指パチン

アドル　「レムノスの身体から、オーラが消えた!?」

レムノス「ふぅ……」

SE：どさり

デュレン「おい、倒れたぞ!?」

カーナ　「レムノス!!」

アドル　「操ってるのが、お前の力なら、この仮面は一体何なんだ……?」

バミー　「この仮面は、さるお方から預かって、実験していたものよ。
どうやら、あらゆる人間の能力を飛躍的に高める力を持っているようね」

デュレン「そ、そんな仮面が……!?」

アドル　「なるほど。戦士でもないレムノスが、あれだけ強かったのは、そのせいだったのか。……でも、おかしいな?」

デュレン「なにが、おかしいんだ、アドル?」

アドル　「ここの入り口のところでも、仮面の男たちと戦っただろ?
彼らはレムノスより、戦士として格上のはずだ」

デュレン「そうなのか?」

カーナ　「ええ、アドルの言う通りだわ。
でも、戦ってみた感じ、
レムノスのほうが強かった……」

デュレン「なるほどな……
戦士として格上の連中より、レムノスのほうが
強いのは、おかしいってわけだ」

バミー　「ウフフ……
あなたたち……彼のことを何も分かっていないのね」

カーナ　「あたしたちが……レムノスのことを、わかってない?」

バミー　「彼は、戦士として大きな素質を持っているのよ……
それも天才的といっていいほどに」

カーナ　「そんな……
いつも竪琴ばかりひいてたレムノスが!?」

バミー　「ええ。ずっと人前で本当の力を隠して生きてきたのね」

カーナ　「ど、どうして、そんなことをする必要があったの!?」

バミー　「ウフフ……
わからないなら、教えてあげましょう。
自分の天才的な力を見せたら、
努力家でひたむきな姉が、傷つくと思ったからよ!
フフフ……アーッハッハッハッ!」

カーナ　「な、何を……言ってるの……?」

バミー　「私は心の闇を見抜き、人を操ることができる魔道師……
彼の、その心の闇を突いて、利用させてもらったのよ。
同情してあげるわ……
出来の良すぎる弟を持つと苦労するわね」

カーナ「そ、そんな……うそよ……」

アドル「カーナ、落ち着くんだ」

カーナ「アドル……レムノスが、あたしのことを
……」

バミー「さて……こう見えても忙しいので
そろそろ失礼させてもらうわ。
ああ、これは忘れずに持って行かないと」

SE：魔法の音

デュレン「ぬおっ⁉
仮面とレムノスが、向こうに……⁉」

カーナ「レムノス、どうして⁉」

アドル「カーナ、危ない！
まだレムノスは操られてるんだ！」

バミー「ウフフ……一応、お礼を言っておくわ。
こんな場所で、こんな逸材を手に入れら
れるとは
思わなかった」

カーナ「ま、待ちなさい！
レムノスを返して‼」

バミー「さようなら……」

SE：転送する魔法の音。

カーナ「レムノス～～～～～～～‼」

デュレン「ああ……消えちまった。転移の魔法か」

アドル「なんてヤツだ……」

カーナ「う、ううぅ……レムノス……」

デュレン「ふぅ……アドル、どうやら、俺たちが
何かできるのは、ここまでみたいだな」

アドル「ああ……」

アドルM「魔道師バミー……
それと、仮面を実験させたというやつ
……
いったい何者なんだろう？」

ナレーション「こうして……
ひとまず、事件を解決したアドルたちは、
アサドに報告をしてから、
さらに樹海の奥へと進むのだった」

○シーン18

○コモド入り口／レオ、サンチョ、パンサ

デュレン「ん？　ありゃ、レオ団長じゃねぇか？
驚いたな……
迷いの森を抜けてきたのか」

アドル「グリゼルダ総督と会ったときに、
話しかけてきた人だな」

デュレン「ああ……
あの団長は《雷鳴のレオ》と呼ばれる、
それなりに有名な将軍らしい。
何でセルセタに来たのか分からんがな
……」

レオ団長「よーし、目標の大樹に到着。
ぜんたーい、止まれッ！」

パンサ「サンチョ兄貴～、
ボクもうヘトヘトだよ～。
ああ、おなか空いたな……」

サンチョ「団長のせいで同じ森の中を
何度も行ったり来たりした挙句、
獣に追い回されたからなぁ」

レオ団長「バカモ――ン！」

あれが樹海での遭難を想定した高度な演習であることに、なぜ気づかん！」

サンチョ「そ、そうだったんですか？」

パンサ「ウソだ、どうせまた適当なこと言ってごまかしてるんだ」

レオ団長「ウソじゃなーい！どんな困難も前向きに考えるのが、俺サマのポリシーなのだ！」

レオ団長「さっさとついて来い！さっそく近辺の調査を始めるぞ」

パンサ（小声）「……サンチョ兄貴、ポリシーって何？」

サンチョ「さあなぁ」

レオ団長「何をしておる、早くせんか！」

サンチョ「ア、アイアイサー！」

パンサ「ア、アイアイサー！」

※2人の声を重ねます。

○シーン19

○ハイランドの礼拝堂／リーザと再会

ナレーション「冒険はつづく――大河を越えて樹海のさらなる奥、《始原の地》に辿り着いたアドル。ハイランドという街の礼拝堂で、アドルは不思議な少女と出会うのだった」

リーザ「――眠れないのですか、アドルさん？」

アドル「あ……ええ……」

リーザ「よかった、アドルさん。あなたが生きていてくださって……」

アドル「もしかして、僕を知ってるんですか？」

リーザ「はい……アドルさんには、わたしが誰か分かりませんか？」

アドル「……すみません」

リーザ「寂しいです……まだ記憶を失ったままなのですね。リーザ……わたしの名前です。どうか、そうお呼びください」

アドル「リーザ……リーザか……」

リーザ「アドルさん、もしよろしければ、少しお話しませんか？」

アドル「ああ……なんとなく、思い出したような気がする」

リーザ「……まあ、本当ですか？ふふ、何だか嬉しいです。あ、あの……それでエルディール様のことは、どれほど覚えていますの？」

アドル「エルディールか……うーん……出会った時のことしか覚えてない、かな」

リーザ「あ、そうでしたか……それでもよかったと思いますわ。そこまで思い出されたのなら、もう、お気づきでしょうか？」

アドル「気づく？　何に？」

リーザ「エルディール様が、アドルさんを選んで、この地へ招待されたのですよ。塔の《知恵》を授けるために……」

アドル「えっ!?」

リーザ「ただ、《知恵》を授かる前に　アドルさんは姿を消してしまわれて……エルディール様がどんな《知恵》を　お渡しするつもりだったかまではわたしには分かりません」

アドル「うーん……
なにがあったのかは、覚えていないけど
……
そんなことがあったのか」

リーザ「……私、アドルさんの記憶のことで、
お伝えしたいことがあります」

アドル「え？　もしかして、僕が記憶をなくした
ことに
ついて、リーザは何か知ってるのか？」

リーザ「はい……
全てではありませんが」

アドル「教えてくれ……
どうして、僕は記憶をなくしてしまった
んだ!?」

リーザ「……アドルさん、それは――」

ナレーション「リーザと名乗った少女は、
アドルの記憶にまつわる重大な事実を
語るのだった」

○シーン20

○ハイランドの街／カンリリカと会う

ナレーション「そして、ハイランドの街を訪れたのは、
アドルだけではなかった」

カーナ「……ごめん、アドル。
もっかい説明してもらえる？」

アドル「ああ、カーナ。
何度説明しても、同じ言葉になっちゃう
けど……」

デュレン「やれやれ……こりゃあ、想像以上に途方
もない話になってきたなぁ、
アドル……」

アドル「僕もそう思うよ、デュレン。
たぶん、カンリリカなら、もっと詳しい
ことを
知ってると思うけど……」

デュレン「ああ、この子、カンリリカつったな。
おい、どーなんだ？」

カンリリカ「むむっ、それが人にモノを尋ねる態度で
すか？」

デュレン「ふふん……オマエ年下、オレ年上」

カンリリカ「大人げない人ですね……
年上がエラいなんて考えは、所詮カビが
生えた
過去の遺物です。
あなたみたいな人が年を取ると、ただの
頑固ジジイになるのです」

デュレン「な、何だとう？」

カンリリカ「べー」

カーナ「ふふ、デュレンの負けね」

アドル「すまないな、カンリリカ。
頼むから、もうすこし説明してくれない
か？」

カンリリカ「……まぁ、いいでしょう。
……確かに《知恵》を受け取った人は、
ここでのことは何も覚えていません。
でも、受け取った《知恵》は、その人の
《閃き》へと変わるんです」

カーナ「ヒラメキ？　えーっと……どういうこ
と？」

アドル「……ここで受け取った《知恵》は、
自分の考えとして日常の中で、ふと思い
つくものに変わる……
そんなところか？」

カンリリカ「わー、パチパチパチ……
お兄さんは話が早いですねー。
……どこかの誰かさんと違って」
デュレン「フン……!!」
カーナ「なんか、難しい話だよね……
それはそうと、あたしたち、
今日は、もう街に出てもいいのかな？」
カンリリカ「そうですね。
みんなも落ち着いたことだし、
問題はないと思います」
デュレン「おぅし！　アドル、カーナ、さっそく街の中を
見物させてもらうとしようや」
アドル「ああ」
カーナ「そうね！」
カンリリカ「それなら、このあたしが、
皆さんに街を案内してあげます」
アドル「ありがとう、カンリリカ」

カンリリカ「いえ……
あ、ひとつだけ注意することがあります。
アドルさんたちだけで、街の北に行ってはダメです」
アドル「街の北……？　あの巨大な塔があるあたりか」
カンリリカ「あれこそがエルディール様の住んでいる塔なのです。
アドルさんがエルディール様にお会いしたのも、
あの場所になります」
アドル「あの塔に……エルディールが……」
カンリリカ「塔の周囲は《雷雨の聖域》と呼ばれていて、無断で入れば、落雷であっという間に黒コゲです」
アドル「そうなのか」
デュレン「な、なるほど……
そりゃ、危ないな」

カーナ「そんなとこ、近づかなければいいでしょ。
さあさあ、アドル、早く行きましょ！」

ナレーション「多くの人と出会い、
多くの真実を知り、
失われた記憶は、その形を取り戻していく。
この《セルセタの樹海》に、どのような
秘密が
眠っているのか。
ひと振りの剣を手にして、
アドルの冒険は幕を開けたのだった」

Ｆｉｎ



月刊 FALCOM MAGAZINE Vol.59

発行人	田中一寿
発行協力	日本ファルコム株式会社
編集	小渕智幸 大場恵美子
デザイン・DTP	さとうだいち／石橋青大／金田悠未
表紙ロゴデザイン	荻窪裕司（ビーニーズ）
発行	株式会社フィールドワイ 〒101-0062 東京都千代田区神田駿河台3-1-9　日光ビル3F TEL 03-5282-2211（代表） http://www.field-y.co.jp/
制作・販売協力	シナノ印刷株式会社

FALCOM MAGAZINE SPECIAL プレゼント!!

アンケートにお答えいただいた方から抽選で
ここでしか手に入らないアイテムをプレゼント！

今月のプレゼントはこちら!!



① 1名様

①『東京ザナドゥ』サイン色紙セット
ミツキ役 山崎はるか&シオ役 鳥海浩輔

『東京ザナドゥ』発売記念プレゼント第３弾、今回は生徒会長のお嬢様と寡黙な不良少年が登場！

② 2名様

②『英雄伝説 閃の軌跡 メンタルクロスリンク』

12月10日に発売されたファルコムブックス最新刊！　もう買った人も年末年始の布教用にいかがですか？

プレゼントの応募方法

こちらのアンケートの回答を下記のアドレスまでメールにてお送りください。
プレゼントの当選者には編集部よりメールにてお知らせ致します。

宛先：
件名：vol.59プレゼント係

1：お名前（ペンネーム可）
2：面白い→
　つまらない→
　（記事一覧から1つずつ）
3：①
　②
　（はい・いいえ／作品名）
4：希望するプレゼント番号
5：ご意見・ご感想など

【記事一覧】

1：イースⅧ最新情報
2：東京ザナドゥ 最新情報
3：みんな集まれ！ファルコム学園
4：英雄伝説 閃の軌跡
5：リベール通信号外
6：エステル＆ヨシュアのファルコム空の軌跡ラジオ
7：ファルコムニュース

アンケート

①今までにファルコムのライブに何回参加しましたか？
②『イース』シリーズの中で好きなキャラは誰ですか？

特設サイトからも応募ができます!
http://www.field-y.co.jp/root/index.php/falmagap

宛先はこちら➡ falmaga@field-y.co.jp　応募締め切り **1月25日**

メールにてお送りいただくお名前やご住所等の情報は、賞品の発送のためのみに利用し、その他の目的には利用致しません。
また、情報は応募締め切り後３ヶ月を越えて保有することはありません。